



恋したい！15 歳！



なお

初めての学校

目の前には、大きな校門がある。
校門の横には西ノ宮第四中学と看板が貼り付けられている。
校門を潜ると、サワサワと風に吹かれて舞い散る大きな桜の木がある。
そう。
今日からあたしの高校生活の始まりの日。

あたしの名前は高田恵利菜。
3月21日生まれの15歳、ピチピチの高校1年生。

将来の夢は。
．．．
恥ずかしいんだけど。
ありきたり？かもしれないけど。
お嫁さんになって、好きな人と毎日一緒に暮らすこと．．．かな？

あたし．．．
まだ1回も恋愛をしたことがないの。
中学の頃も告白されたこともないし。
あたしって、あまり可愛くないから。
仕方がないよね。

性格はおとなしい方だったから、男の子とあまり会話もしなかった。
だから好きな人も出来なかったのかな？と思う。

でもね。
この高校生活では、変わろうと思ってるんだ。
いっぱい男の子とおしゃべりをして。
仲良くなって。
恋愛をしてみたいな。

「えっと．．．あたしの教室は．．．」
張り出されているクラス表から、自分の名前を探す。
「あった。D組か」

1年生の校舎に入り、D組を探す。

この学校の1年生のクラスは、Aから始まってF組まであるみたい。

順に過ぎていくクラスを眺めながら、D組へと向かう。

教室の前につくと、思っていたより中から声が聞こえてくる。

一呼吸おいて、教室の横開きなドアを開ける。

ガラガラガラァ。

教室をぐるっと見渡すと、女の子より男の子の方が多いように見えた。

男の子達はバラバラに座っていたり友達と思われる男の子とおしゃべりしていたりしているみたいだけど。

女の子はみんな固まって話をしているようだった。

黒板に張り出されている座席表を確認し、自分の席へ向かい、腰を下ろす。

すると。

さっきまで固まっていた女の子達があたしを取り囲むようにして集まってきた。

そんな光景にびっくりして、ちょっと焦る。

そんなあたしを見て、正面にいる女の子が声をかけてきた。

「ねえねえ。どこの中学から来たの？」

「西ノ架空中学だけど・・・」

「へえ。あたしの学校に近いね。あたしは東ノ架空中学だよ」

「わあ、そうなんだ。結構近いね！」

初対面だけど、思ったより会話が弾む。

「自己紹介まだだったね。あたしの名前は加藤美恵。よろしくね」

「あたしの名前は高田恵利菜。よろしくね」

加藤さんの横であたしを見ている子が加藤につっこみを入れる。

「美恵だけしゃべってるしー。ずるーい」

「ごめんごめん。紹介するね。この子が山下千秋さん。その隣が宮沢江美さんで、その隣が池田美千子さん。その隣が文山小百合さんで、その隣が

小林恵さんだよっ」

「えっと・・・急にいっぱい自己紹介されても・・・」

「ん？覚えられないって？」

「う・・・うん」

「まっ、友達としてこれからよろしくね」

「うん！」

あたしは大きな声で返事した。

嬉しいな。

教室に入るなり、直ぐに友達いっぱい出来ちゃった。

名前と顔覚えるのが大変だけど。。。

こんな調子で、彼氏も出来たらいいな・・・

なんて。

いったい、本当の恋愛ってどんなものなのかな？

心が張り裂けそうになるくらい嬉しいもの？

それとも。

なんのかな？

まだわかんないや。

でも、そう思うとわくわくしちゃう。

早くわかるようになりたいな。

「あ、恵利菜ちゃん。先生が来たよ」

はっ。

周りに取り囲んでいたみんなは直ぐに自分の席へ戻っていった。

教室をぐるっと見渡すと。

さっきまであいていた席も全て埋まっていた。

先生は入ってくるなり、自己紹介や出席を確認している。

そんな中。

トントン・・・

ん？

誰かが後ろから背中をつついてくる。

後ろを振り向くと。

ニコッ。

スマイルを飛ばしてくる加藤さんだった。

「ねえねえ、オリエンテーション一緒になろうよ！」

「えっ？オリエンテーション？何それ？」

「なにそれって今、先生が言ってたじゃん」

「ごめん、話聞いてなかったんだ」

「もうー。恵利菜ちゃんって、聞いてそれで聞いてないんだね」

「ごめーんっ」

ポリポリと頭をなでながらごまかす。

「ところで、1グループ何人なの？」

「本当に全然話聞いてないのねえ。8人って言ってたよ」

「そうなんだ。男の子も混ざるのかな？」

「ううん。女の子と男の子は別のグループみたいだよ。女の子は少ないから、女の子全員が1グループみたい」

「そっかそっか。じゃあみんなと一緒に楽しめるね」

「そうだねー。すごく楽しみー」

加藤さん、すごく楽しそう。

積極的で明るくて。

あたしにとって、頼りになる人に思えた。

・・・

「起立！」

ガラァッ

先生の号令とともに、みんなが立ち上がる。

あたしもあわてて立ち上がる。

「礼！」

みんなが先生に礼をする。

「それでは、先生が戻ってくるまでそのまま教室にいるように」

そう言い残し、先生は教室を後にした。

先生が教室からいなくなった数秒後には、教室がざわめき始めた。

加藤さんがまた腰をツンツンしてくる。

あたしが振り向くと、直ぐに質問してきた。

「ねえねえ恵利菜ちゃん。彼氏いるの？」

「えっ！」

聞かれた瞬間。

ドキッとした。

「いいじゃんー。教えてよー」

加藤さんは積極的に聞いてくる。

「加藤さんこそ、彼氏いるの？」

つつい質問返ししてしまう。

「あたし？いると思う？」

「うん。だって、すごく美人だし」

「そうかなあ。でも恵利菜ちゃんだって可愛いじゃない。あたしより恵利菜ちゃんのほうが男の子には人気あると思うよー？ほら」

加藤さんがあたしから斜め前の席へ視線を変える。

その視線の先をたどっていくと。

目線があった男の子がいた。

その男の子は直ぐに視線をそらした。

慎重はまあまあ高そうで、センターわけのサラサラしてそうな

綺麗な髪をしてて、まるで女の子のような綺麗な顔した男の子だった。

「ねっ。恵利菜ちゃんをずっと眺めていたでしょ？」

小声で加藤さんが声かけてくる。

「きっと、たまたまこっち向いてただけだよー」

「そうかなー？ねえ、恵利菜ちゃん」

加藤さんが真剣な表情に変わる。

「これって、一目ぼれされたんじゃない？」

「えっ！？そんな」

あたしの顔が真っ赤に染まる。

「あっ、恵利菜ちゃんてれてる～」

「そっ、そんなことないもん！」

すると、加藤さんが何かひらめいたような表情をして。

「わかった！」

「わかったって、何が？」

「恵利菜ちゃんって、付き合ったことないでしょー」

「え・・・どうしてわかったの？」

「だって、顔にそう書いてあるもん」

「どこどこっ」

あたしは顔中手探りで探す。

「あははっ！恵利菜ちゃん面白いね！すごく気に入っちゃったよ！」

「あはははは・・・加藤さんは付き合ったことがあるの？」

「加藤さん、じゃなくて美恵でいいよ」

「美恵ちゃんね。うん、わかった」

「付き合ったことかー。あったことはあったねー」

「そっかあ。付き合いってどんな感じなのかな？」

「んー・・・」

美恵ちゃんは難しそうな顔をする。

「まあ、付き合いって大変だよ」

「そうなの？」

「あたしの場合振り回されて疲れたてたって感じだったかな」

そう言って凄く悲しそうな表情に変わる。

「美恵ちゃん。ごめんえ、言いたくない事言わせちゃって」
「ううん、いいの。なんか恵利菜ちゃんと一緒にいると面白いし、
落ち着くよ」
「落ち着くの？」
「うんうん。あたしさあ、恵利菜ちゃんと友達になれて嬉しいよ！
親友よろしく！」
「あはは・・・ありがとう」

なんか。
そういうこと言ってくれて、すごく嬉しい。

ガラガラッ！
「さあ席につけよ」
何かプリントを持って先生が戻ってきた。

各列の先頭にプリントを配布する先生。
先頭の人次々に後ろの人へプリントを回す。

プリントを見ると、オリエンテーションのプリントみたい。

全員にいきわたった事を先生は確認し。
「えー、オリエンテーションの話なんだが修正がある。
先ほど8人でグループと言ったが、16人で1グループとする。
女子は4人ずつ分かれるか8人セットかどっちがいい？」

美恵ちゃんがすくっと立ち上がり、ピンと手を伸ばす。
「8人全員がいいで一す」

と、さすが積極的。

「そうか。じゃあ、どっちの男子グループとなるか決めてくれ」

先生の声の後、一人の男の子が立ち上がった。

「じゃあさ、俺たちと同じグループに入らね？」

美恵ちゃんはその男の子に即答する。

「うん。いいよ別に。じゃあよろしくね」

いつの間にか美恵ちゃんは女の子グループのリーダー的存在になっていた。

「よし、じゃあ二人とも座って。えーと、グループメンバーを言うから
忘れないようにな。みんなに分かる様、呼ばれたら返事するように」

そうって先生は2つのグループメンバーを言い始めた。
ぼーっとしながら呼ばれるメンバーを見ていると、
さっき目があった男の子も同じグループという事に気がついた。

あたしはその男の子を見ていると、こちらを振り向き。

にこっ！

スマイルを飛ばしてきた。

ヒャー！

思わず直ぐに目を背けてしまった。

「ほら、恵利菜ちゃん」

「へっ？なに？」

「何ってまた聞いてなかったの？」

「あ、ごめん。聞いてなかった」

それどころじゃなかったよ。

あんな暖かいスマイル急に飛ばされたら何だか照れちゃうよ。

「恵利菜ちゃん、何照れてるの？」

「えっ！照れてなんかいいよ！」

「そう？だって顔赤くなってるよ？」

「ええ！うそうそ」

あたしはすぐに頬へ両手を当てると。

「まさか、俺を見て赤くなってんの？」

後ろから話に割り込む男の子の声。

振り向くと、さっき一緒にグループになりたいと立候補した男の子だった。

「ちっ違うわよ。ちょっと熱っぽいだけ。残念でした」

必死に弁解する。

「ちえ。違ったか。つまんねーの。名前、恵利菜ちゃんだっけ？」

「うん。そうだけど」

「同じグループだし、よろしくな」

「うん」

いきなり下の名前で呼ばれると、何だか照れちゃう。中学の時はそういう男の子はいなかったし。

「・・・へえ、恵利菜って言うんだ。いい名前だね」

正面を向いていたスマイルを飛ばしてきた男の子が、こちらを向いて話しかけてきた。

「・・・どうもありがとう」

話横から聞いてるとか、何かちょっと怖いよ！

「こら！そこ！先生の話はまだ終わってないぞ！」

「はいはい」

先生が怒り始めた。

立候補してきた男の子は適当な返事を先生に返す。

先生は再びグループメンバーの紹介を始めた。

そんな中、後ろから美恵ちゃんが小声で話しかけてくる。

「ねえねえ。あのスマイル君。なかなか格好良いじゃない？

付き合っちゃえば？」

「そっ、そんなぁ・・・」

美恵ちゃん、大胆発言すぎてびっくりする。

「でもさあ、あの子ってやんちゃっぽい顔してるけど、
何か大人しそうだよね」

「そう？」

「うん。女の子と付き合ったことは1回あるかないかだと思っなー」

「そうかなあ」

わたしが付き合ったことないからさっぱりわかんないや。

バンッ！

びっくりして先生の方を見ると、先生もこちらをにらんでいた。

「そこの2人、静かにしなさい」

「はい。すみません」

謝ると、先生はまた話の続きをはじめた。

オリエンテーション。

あのスマイル君とも一緒に行動しなくちゃいけない。

もし。

もしだよ。

告白とか・・・

されちゃったらどうしよう！

ちゃんと断る事が出来るのかな。

どうしようも出来なくて、“はい”て言っちゃうのかな。

そう思うと。

何だか怖い。

オリエンテーションに行きたくないー。

考えすぎかな。

変なことを考えちゃうとその事しか考えれなくなっちゃうよ。

・・・

そんな事を考えているのもつかの間。

ついに、オリエンテーションの行く日がやってきたのです。

身近な恋の花びら

チュンチュン。

小鳥たちの演奏会が始まっている。

あたしにとっては、目覚まし時計みたいなものなの。

ベッドから起きると。

顔を洗って。

歯をみがいて。

毎日起こしてくれる小鳥さんたちに挨拶。

「小鳥さん。今日から3日間、オリエンテーションに行ってきます。

応援してね」

そう言う。

小鳥さんたちは、話が通じたのか。

チュンチュン

そうやって何処かにいってしまった。

オリエンテーションに必要な物を再チェックする。

ハンカチ。

はなかみ。

下着。

体操服。

シャンプー。

トリートメント。

バスタオル。

ナイロン袋。

お菓子。

ドライヤー。

ムース。

筆記用具。

オリエンテーションのしおり。

よし、再チェック終わり。

忘れ物なしと。

あとは良いオリエンテーションにするだけ。

大丈夫かな。

告白なんか、してこないよね。

そうだ。

美恵ちゃんの側についていこう。

そうしたら、あの子も告白なんかしてこないよね？

うん。

そうしよう。

あたしは急いで着替え、集合場所に向かった。

...

集合場所につくと、美恵ちゃんは既にいた。

オリエンテーションに連れて行ってくれるバスも到着している。

あたしは美恵ちゃんに駆け寄る。

そんなあたしに気が付き、軽く手を振ってくれる。

「おはよ、美恵ちゃん」

「おはよう。恵利菜ちゃん。ぎりぎりだね」

「うん。持ってくるもの再確認してたら遅くなっちゃった」

「そっかそっか。間に合ってよかったね」

「うん」

美恵ちゃんへ来る前に考えたこと、伝えよう。

「あのね、美恵ちゃん。オリエンテーション中、美恵ちゃんについていくね」

「ん？そうなの？」

「あのスマイル君があたしの側にいるとき、

出来るだけ一緒にいたいなーと思って」

「どうして？嫌なの？」

「うん。いや・・・かな」

「あら。何かあったの？」

「何かあったわけじゃないんだけど・・・」

美恵ちゃんは何かひらめいたように手をポンとたたく。

「わかった！恵利菜ちゃんあの子意識してるんでしょー」

「そっそんなことないんだから！」

「またあー。あの子を見て、格好良いとか何とも思わない？」

「格好良いとは思うけど・・・」

「自分に自信持ちなよっ。あたしは可愛いんだって。

本当に可愛いんだから大丈夫だよ」

「・・・そういわれても・・・」

あたしはつい頬をなでる。

「まあ、一緒にいるから安心して。心配しなくていいよ」

「うん。ごめんね」

「何言ってるのよ。みずくさいなあ。友達でしょ？」

「ありがとう。優しいんだね」

「今気づいたの？」

「ううん。特にそう思っただけ」

「あははははは」

やっぱり美恵ちゃんは最高の友達だよ。

この学校に入れて本当によかった。

もう、心配いらないや。

でも。

そう思えたのも段々薄れていくなんて。

この時には思いもしなかったんだけど。

・・・

あたしたちを運んでくれたバスから降り、

大自然を前に伸びをする。

出発前は朝だったのに、もう夕暮れ。

澄んだ空気が鼻をくすぐる。

ここは、大阪の貝塚にある少年自然の家。

景色は良いし、空気もおいしい。

夕焼けの自然を目にすると、気分も落ち着く。

自然に恵まれた最高の場所。

「うーん。おいしい空気。大自然って感じだね。

あたしたちが住んでいる大阪とは全然違うねー。

ねえ、美恵ちゃん」

「うん。そうだね。おいしい空気が最高」

つつい深呼吸までしちゃう。

「来てよかったね、恵利菜ちゃん」

「うん。よかったよかった」

オリエンテーションのしおりを広げ、
この後のスケジュールを確認する。

これからお風呂に入ってご飯を食べる。

それからは嫌な講義。

あとは夜食を食べて寝るだけ。

今日の日程はそれだけかな。

「うん。今日の日程では男の子と触れ合うことはないね」

「へっ？」

美恵ちゃんがキョトンとした顔をする。

「なに？美恵ちゃん。あたしの顔に何か付いてる？」

「いや、そうじゃなくて。今日の日程では男の子と触れ合うことはないって
言ったでしょ？」

「うん。言ったけど。それが何か？」

「グループが一緒なんだから、寝るときだって一緒の部屋だよ？」

「え————！聞いてないよ————！」

「先生が言ってたよ。恵利菜ちゃんが聞いてないだけだよ」

「う————」

「まあ、大丈夫だと思うよ」

「どうして？」

「他の男の子もいるし、告白なんかするわけないじゃん」

「・・・それはそうかも」

「そういうことは気にしない気にしない。楽しいオリエンテーションにしようよ」

「うん！」

そうだよね。

してくるはずないもんね。

みんないるんだもんね。

「恵利菜ちゃん」

「ん？」

「お風呂入りにいこー」

「あ、忘れた。いこいこー」

そういうと。

あたしたちはお風呂場に向かった。

・・・

宿泊にしては、少し小さいと思われるお風呂。

もちろん、男女別のお風呂です。

でも、男風呂が女風呂の1つ下の階なので、男の子たちが何をしゃべっているのかははっきり聞こえてくる。

「あー、気持ちいい。でもここ、少し小さいね。

もうちょっと大きいお風呂かと期待してたのになー」

山下さんが悔しそうにつぶやいてる。

「ほんとほんと。がっくりきちゃった」

文山さんもつられてつぶやく。

「ねえねえ、みんな。ちょっとこっちにきて」

美恵ちゃんがみんなを手招きする。

「なにになに？」

みんなが美恵ちゃんの周りに集まる。

「この窓の下から、男の子たちの声が聞こえてくるよ」

「そうなの？男風呂は下の階にあるんだっけ」

「うん。今、あたしたちの事話してるよ」

「どれどれ・・・」

みんなが、窓の近くに耳を近づける。

もちろん、あたしも。

「・・・」

何か小さな声で聞こえてくる。

"俺たちのグループの女子でさ、可愛いと思う子いたか？"

"うーん。いなかったかなあ"

"お前は？"

"俺か？俺はさあ、加藤って子が良いなあ。顔がポッチャリしてるじゃん"

みんな美恵ちゃんを見る。

美恵ちゃんはお風呂のせいか、頬が少し赤くなっているように見えた。

"仲居は？"

"お・・・おれか？"

この声は。

スマイル君だ！

"俺は・・・"

"どうなんだよ。まさか、高田とかいうやつじゃないだろうな"

あたしは、息を飲む。

"ちがうよ。俺は誰も可愛いとは思えなかったな"

"本当か？あやしいなあ"

"本当だってば。俺、もうのぼせそうだから出るよ"

"おう。じゃあな"

ガラガラガラ・・・

どうやらスマイル君こと仲居くんはお風呂から出て行ったみたい。

「みんな、見る目がないわね」

「ほんとほんと。こんなに可愛い子が目の前にいるってのに」

美恵ちゃん以外の子が、ぶつくさ言ってる。

美恵ちゃんを見ると、何か難しそうな顔をしていた。

「美恵ちゃん、どうしたの？」

「恵利菜ちゃん。さっき広瀬くんがあたしの事好きって言ってたよね？」

「名前は知らないけど、誰かが言ってたね」

「・・・あたしも、広瀬くんの事格好良いと思ってたんだ」

「と、言うことは？両思いってこと？」

「かな」

あたしは手をパンッとたたく。

「やったね、美恵ちゃん！あとは広瀬くんが告白してくるのを待つだけだね！」

「うん。まあ、恵利菜ちゃんも本当のことがわかってよかったね」

「うん。仲居くんね。一時はどうしようかと思っちゃってたけどね」

「そうだね。さ、そろそろ出よっか」

「うん。そうしよ」

あたしたちはそういうと、お風呂から上がった。

良かった。

あたしのことどうも思ってなかったんだって知ったら、ホッとしちゃった。

でも。
あとから考えたら。
ちょっとがっかり？
かも。。。

そんなことないか。
でもやっぱり。
もったいなかったようにも。。。

妙に考えちゃう。
なんでだろう。

まっ、いっか。
あとあたしがすることは。
美恵ちゃんを広瀬くんとうまくいくように手伝ってあげることかな。

そう思うと。
なんだかわくわくしちゃう。

オリエンテーションの夜

...

みんなと楽しい時間。

わいわいおしゃべりしながらご飯を食べる。

男の子たちと一緒に食べ始めたんだけど、男の子たちは食べ終わると直ぐに部屋に戻っていった。

女の子は食べ終わった後もその場に残って軽い女子会状態。

時間の制限もあり、先生の合図であたしたちは部屋に戻るようになった。

あたしたちの部屋は大きな和室の部屋に、男女16人。

寝るときは部屋の中央にある仕切りを境界線として、男女別々に寝るみたい。

部屋は同じだけど、ふすまで仕切りを締め切れるから、思っていたよりは安全。

かな？

オリエンテーションの時期だけあり、他の学校の人とかいっぱいいた。

こんな自然がいっぱいな所だもん。

人気あって当然だよ。

あたしたちが部屋に戻ると、男子の一人がこっちを見て手招きしてきた。

「なあなあ、トランプしねえか？」

「どうする？美恵ちゃん。トランプする？」

美恵ちゃんに判断を委ねると。

「うん。しようかな」

「じゃあ、あたしもしよっと」

「よし、決まり。じゃあやるもんだけ円になってよ」

言われたとおり指定された場所を中心に座る。

他の女の子も来るのかと思ったら、他の男の子から誘われた人生ゲームのほうに行っちゃった。

あたしも人生ゲームやりたかったかも。
まあもう座っちゃったしトランプするけど。

トランプする人が円になり、みんな座ると広瀬くんが話し出した。

「そんじゃ、トランプで何やる？ポーカーって知ってる？」
「何言ってるんだよ広瀬。女子がそんなもん知ってるわけないじゃん」

広瀬くんの隣にいる山崎くんがつっこみを入れる。

「あたし、ポーカー知ってるよ」

そんな中、美恵ちゃんは即答した。
広瀬くんは美恵ちゃんをみて、驚いた顔をしながら。

「へえー。知ってた。高田さんも知ってる？」
「えっと、あたしは知らない・・・」

あたしの返事を聞いて、広瀬くんの隣にいる男の子が。

「ほら、普通女子は知らないんじゃないの」
「いいですよー。どうせあたしは普通の女子じゃないですからっ」

美恵ちゃんがムスツとした声になった。

「こらこら、普通の女子じゃないとか言いすぎだぞ。
ごめんね、美恵ちゃん。山崎は悪気があって言ったわけじゃないからさ」

広瀬くんが美恵ちゃんに弁解する。

「しょうがないなあ。許してあげる」
「よかった！サンキュー！」

美恵ちゃんと広瀬くんが見詰め合って笑顔になった。

広瀬くんって優しい所あるんだなって思った。

美恵ちゃんとも仲良く出来そうな感じだし。

広瀬くんだったら何も手伝わなくても大丈夫みたい。

付き合うのも時間の問題かも。

あたしも早く優しい彼氏がほしいな～。

そんな事を考えながら。

広瀬くんが教えてくれたポーカーを四苦八苦して覚え。

ポーカーを始める。

最初は大勢でポーカーしていたものの。

段々と人が減り、気づいたら広瀬くんと山崎くんと

あたしたちの4人で楽しんでいた。

周りが寝静まる中、4人だけの時間がゆっくり進む。

．．．

突然、パッと電気が消える。

蛍光灯によって照らされていた部屋も。

一瞬にして暗闇の世界になった。

「あっ。消えちゃった」

みんなが蛍光灯の方を見上げる。

「もう消灯かよ！早いなあ」

広瀬くんが悔しそうにする。

「本当だね。今からって所だったのに。消灯の時間早いよね」

美恵ちゃんも残念そうに言う。

「しゃーねえな。暗闇の中じゃ出来ないし、大人しく寝るかな」

「そうだね。寝よっか」

「また明日もやろうな」

「うん」

ガサゴソ。

広がっていたランプを丁寧にかき集め、箱にしまう。

「さてと、んじゃ向こうで寝るからまたな」

「うん」

広瀬くんたちは男の子たちが寝る所へ向かっていった。

と、思いきや。

2人ともすぐに戻ってくる。

「どうしたの？」

「いや、それがさあ。俺たちの布団。ないんだよね」

「ええ!？」

こっそりと男の子たちが寝てる所を確認する。

確かに二人分の布団がひかれていない。

「仕方ないなあ。こうなったらさ、2人1つの布団で寝るってのはどうよ？」

山崎くんが話を持ちかけてくる。

「ええー！山崎くんと広瀬くんが一緒に寝たらいいじゃん」

美恵ちゃんがここもやはり即答する。

「まあまあ。せっかくだしさ、男女ペアで寝ようぜ！」

「ちょっとちょっと！意味わかんないし！」

あたしはあせって二人を止めようとするけど。

「な、広瀬。お前もそっちの方がいいだろ？俺と寝るより」

「ん、まあ。そっちの方が嬉しいっちゃ嬉しいけどさ」

広瀬くんもグルになって話をもちよってくる。

あたしは美恵ちゃんに助けを求めるかのように美恵ちゃんの方を向くと。
美恵ちゃんもこちらを向いて。

「ペアねえ。恵利菜ちゃんはペアでもいい？」

「ええー！」

美恵ちゃんもまさかの質問！？

それってまさか、美恵ちゃんはペアで寝たいわけ？

驚いているあたしを見て、美恵ちゃんが男の子に見えない瞳を軽くウィンクした。

．．．

これって。

ペアで寝ろってこと～？

「んじゃ決まりだな。どっちがどっちと寝たい？」

山崎くんが確定したかのように問いかけてくる。

「えー．．．うーん」

あたしは悩みこむ。

どうせペアで寝るなら、広瀬くんと美恵ちゃんをペアにしてあげるのが
いいと思うんだけど。。

ウィンクもしてきたし。。

考え込んでいる中、美恵ちゃんが男の子たちに。

「それじゃあ、じゃんけんして決めるから後ろ向いててくれる？」

「おう。いいぜ」

そう言って二人はあたしたちに背を向けた。

美恵ちゃんはあたしの耳元で小声でヒソヒソ。

"恵利菜ちゃん。あたし、広瀬くんと一緒でもいいかな？"

"うん。いいけど。本当に二人で寝るの？"

"二人って言っても、周りに女子もいるし、何もないよ"

"まあ、そうだけども。。"

"お願い、恵利菜ちゃんー"

両手の平を合わせておねだりポーズをしてくる。

そんな姿を見てあたしはひとつため息。

"わかったよ。じゃあ、あたしは山崎くんね"

"恵利菜ちゃんありがとー！"

嬉しさのあまりか、あたしの手をぎゅっと握ってくる。

「じゃんけん、決まったよ！」

美恵ちゃんの声聞いて、広瀬くんと山崎くんはこちらを振り向く。

「それで、結果は？」

「あたしが広瀬くんで、恵利菜ちゃんは山崎くんとだよ」

「そっか。良かったな、山崎」

「何言ってるんだ。良かったのは広瀬のほうだろ？」

「へへ。そうかもね」

広瀬くんが人差し指で鼻をこする。

もしかして広瀬くんも脈あり？

「じゃあ、俺は高田さんと一緒に寝るわ」

「おう。じゃあな」

あたしたちはそれぞれの布団へ向かった。

．．．

山崎くんはあたしの布団へ先に入り、あたしはその横に横たわった。

布団の中では少し二人の距離が近づくものの、

手が触れない程度の距離は保つ。

しばらくして、山崎くんが小さな声で話しかけてきた。

「なあ、高田さんが中学の時、誰かと付き合ったことあった？」

「あたしは付き合ったことなかったよ。山崎くんは？」

「俺は・・・俺もなかったな」

「そっか。案外、もてそうな顔してるのにね」

「そうかなあ。世の中、うまくいかないもんだよ」

「うん。確かにそうだね」

「女の子って、一体どうされたら人を好きになるの？」

「うーん。どうかなあ。やっぱり、優しい人かなあ」

「優しい人かあ。難しいなあ」

山崎くんって。

結構、男の子たちと一緒にいるときははしゃいでる雰囲気だけど。

本当は違うんだな。

「ねえ、高田さん」

「ん？なに？」

「突然なんだけどさあ」

「うん」

一瞬間が空いた。

「どうしたの？」

感じる視線

「キスって、女の子の憧れって聞くけど、実際の所どうなの？」

「キス・・・かぁ。まぁ、あたしにとっては憧れかなぁ」

「どういう風な憧れ？」

「うーん。何か、口では表すことの出来ない、女の子同士しか、
わかることの出来ないもの、かな？」

何かちょっと格好良く言っちゃったけど。

レモンの味って言うし。

どんなものなのか考えるだけで時間がたっちゃいそう。

「ふうん。そんなもんなんだ」

「うん」

そういうと。

「おやすみなさい」

と、一言言って反対向きになった。

それから声をかけてくることなく、シーンとなる。

そんな中、美恵ちゃんたちのヒソヒソ話が聞こえる。

美恵ちゃんは何を言ってるのか聞こえないけど。

広瀬くんは声が大きいから比較的聞こえる。

他のみんなは。

周りを見渡してみるけど、みんな寝てるみたい。

あたし以外、誰も広瀬くんと美恵ちゃんの話聞いてそうにない。

広瀬くんたちが開けっ放しにしていたふすまの先にある

男の子が寝ているゾーンにも目を向けてみると・・・

！！！！

一人の男の子が寝転びながらこちらを見ているような気がした。

あたしは慌てて逆の方に体ごと向きを変える。

また。

まただ。

あの男の子は仲居くんだ。

こちらを見ていた気がする。

あたしと今、目があった。

間違いなんかじゃない！

なんだか怖いよ。

どうしてなの。

どうしてあたしなんか見詰めるの。

怖いよ。

仲居くんの考えていることがわからなくて怖い。

やだよお。

せっかく楽しいオリエンテーションにしたいのに。

考えすぎちゃって、楽しいのも楽しくなくなっちゃう。

そうだ。

早く寝よう。

そして。

今日のこと、完全に忘れよう。

そう思いながら。

再び仲居くんのいる方向に顔を向けることなく。

深い眠りについたの。

．．．．

目を開けると。

視界の中は明るかった。

気が付いたときには、朝を迎えていた。

チュンチュン。

ここでも小鳥のさえずりが聞こえる。

体を半分起こすと、ぶるっと寒気を感じる。

さすがに山の上だけあって朝は凄く寒い。

周りを見渡すと、まだ早かったようでみんな寝てる。

座ったまま、グッと伸びをする。

伸ばした足に何かあたる。

横を見ると、そこには山崎くんが寝ていた。

そういえば、あたし山崎くんと一緒に寝たんだっけ。

ぼーっとしながら山崎くんを覗くと。

なんか、寝顔がすごくかわいい。

子どもみたい。

そういえば広瀬くんと美恵ちゃんはどうなったんだろう。

二人の布団を見てみると。

！？

あらら！？

何か抱き合って寝てるように見える。

昨日の夜。

上手く自分の気持ち伝えたのかな？

それとも、偶然？

偶然じゃないんだとしたら。

凄く進むの早い・・・

あたしと大違い。

いいな。

あたしも大好きな人と一緒に抱き合いながら夜を過ごせたら。

どんなに幸せなんだろう。

夜・・・

二人・・・

まさか、ね？

そんなことするわけないよね？

何か。

あたし変なこと考えてる？

起きたばかりなのに。

何変なこと考えているんだろ。

バカみたい。

時計を見ると、まだ朝の5時。

起床時間まであと1時間もある。

そりゃ、誰も起きてるはずないよね。

目も覚めちゃったし、みんな起きたら山崎くんが一緒じゃ何か言われそうだし。

このまま起きておこうかな。

そうしよう。

直ぐに今日の準備が出来るように顔とか洗っておこう。

あたしは布団から出て、洗面場へと向かう。

中に入ると、ひとりの男の子が顔を洗っていた。

あたしが中に入ると、男の子は顔を拭きながらこちらに気付き、

声をかけてくる。

「おはよう。もう起きたの？早いね」

「うん。寒くて目が覚めちゃった」

「そうなんだ。昨日は良く眠れた？」

「うん。一応眠れたよ」

「そっか。環境が変わると寝付きにくいよね」

「そうだねー。いつも使っている枕とかじゃないしね」

「だぁね」

男の子は顔を丁寧に拭き始めた。

あたしも顔を洗った後、ハブラシに歯磨き粉をつけて、歯を磨く。

「そんじゃ」

と、男の子は洗面場を後にした。

いまさらながら。

誰だろう。

名前聞いてなかった。

あたしのクラスには間違いないと思うけど。

まあいっか。

口をゆすぎ、鏡で綺麗になったか点検。

うん、綺麗。

ばっちり。

あたしも部屋へ戻ると。

美恵ちゃんが起きていた。

広瀬くんは美恵ちゃんの隣にはいなかった。

「おはよう、美恵ちゃん」

「あ、おはよう恵利菜ちゃん。朝、早いんだね」

「ううん。今日はたまたまだよ。それより、美恵ちゃん」

「うん？」

「昨日、広瀬くんと進んだの？」

そう言うと、美恵ちゃんが口元に手を添える。

「恵利菜ちゃん、もしかして見てたの？」

「いや、見てはないけど。朝一緒に抱き合って寝てたみたいだから」

「そっかあ。昨日ね、夜みんなが寝た後に広瀬くんが良かったら

付き合ってくれないかって告白されちゃったの」

「おおー！それでどう返事したの？」

「もちのろん！OKしたよ」

「すごーい！良かったね！」

「うんうん。ありがとう、恵利菜ちゃん」

美恵ちゃんは凄く嬉しそうにしている。

「ねえ、美恵ちゃん。キスとかしっちゃった？」

「ん？そこまではしてないよー」

「そっかあ」

「広瀬くんってね、見た目より優しくて、面白くてもうサイコー！って感じ」

「あはは。良かったね」

「うん。これからは恵利菜ちゃんのお手伝いしてあげるからね！」

「ありがとう。じゃあ、うんっと頼らせてもらいます」

「うんうん。どんとこーい。だよっ」

美恵ちゃんって良いな。

もう付き合っちゃってる。

あたしも早く好きな人が出来ないかな。

ピトってくっついて甘えてみたい。

あっ！

そういえば、仲居くんの話をしておこう。

「そうそう。昨日仲居くんがね、夜寝るときにまたあたしの事見てたの」

「えっ、仲居くんって好きな人いないんじゃないじゃなかったっけ？」

「昨日はそう言ってたんだけどねえ」

「もしかして、あの時言うのが恥ずかしくなったからいないって言ったとか？」

「と、言いますと？」

「本当は好きな人がいるんだけど、人前だったから嘘を言ったとか」

「・・・」

「もしそうなら・・・」

「うーん。男の子考え方はおくが深い・・・」

「仲居くん、正直言って格好良いと思うよ。恵利菜ちゃんだって格好良いと思わない？」

「まあ、格好良いとは思うけど・・・」

「でしょ？そうだ！」

美恵ちゃんがポンと手を叩き、キラキラした目であたしを覗き込む。

「あたしがチャンス作ってあげる！」

「チャンス？」

「そう。ある程度話をしてみて、自分にあっているかとか感じてみたらいいんじゃない？」

「性格チェックですか・・・」

「まあ、付き合うわけでもないし、話してみると案外気があっちゃったりするかもよ？」

目が合っちゃうのは向こうも意識してるって事かもだしさ」

「うーん・・・」

考えていると。

後ろからギシギシと畳を踏みしめる音が聞こえる。

振り向いてみると、広瀬くんが寝ぼけた顔で目をこすっていた。

「お二人さんおはよう。起きるの早いね」

そう言いながら、リンゴが1つ、まるまる入りそうなくらい大きなあくびをする。

そんな広瀬くんを見て美恵ちゃんは。

「かわゆう〜っ！」

クスクスと笑い出す。

すると広瀬くんが頬を赤く染めながら。

「うるせえ！かわいいとか言うなよなー」

「じゃあ、何て言えば良いの？」

「格好良い、と言いなさい」

「格好良い！最高〜！」

美恵ちゃんは言われるがままにノリ返す。

「それならOK！」

グッドサインをだした広瀬くんはクルッと後ろを向き。

「んじゃ、顔洗って来るわ」

そう言うと、タオルを持たずに行ってしまった。

「タオル持たずに、どうやって顔ふくんだろう」

美恵ちゃんが不思議そうに言う。

「きっと、忘れて行ったんじゃない？帰ってきたらビショビショかもね」

「そうかもね。広瀬くんの性格だったらやりそうだわ」

「ちょっと楽しみね」

「ふあああ」

後ろから声がする。

振り返ってみると、仲居くんだった。

広瀬くんに負けないくらいの大きなあくびをしていた。

仲居くんがこっちに気付くと。

「高田さんと加藤さん。おはよう。今日はいい天気だね」

「うん、そうみたいだね」

あたしが普通の表情で答える。

「朝早いんだね。もう起きてるなんて」

「うん。今日はたまたま。違う所で寝ると早く起きられるみたい」

「ふうん。そうなんだ。俺なんか、どこで寝ても一緒だよ」

「それはそれでうらやましいかも」

しゃべってみると、仲居くん意外と普通かも。

でも、昨日の事とか何も言ってこないな。

「恵利菜ちゃん、あたし顔洗ってくるね」

「あ、うん。わかった」

「じゃあね」

美恵ちゃんが洗面場に向かおうとすると。

「おーい」

広瀬くんの声が聞こえる。

「あはははははっ！おっかしいー」

広瀬くんは思っていた通り、ビショビショになって帰ってきた。

「誰かタオルかしてくれ。ビショビショだよ」

「はい、タオル」

美恵ちゃんがタオルを差し出す。

「お、サンキュー。さすが気がきくなあ」

「だって、ビショビショになって帰ってくるって予想してたもん」

「そうか、やるなあ」

そういいながら、顔全体を借りたタオルでぬぐう。

「さて、そろそろメシの時間か」

「まだ30分もあるよ」

「そうか。じゃあまた寝るよ」

広瀬くんはそういうと、また布団に戻っていった。

「じゃあ、今度こそ顔洗ってくるね」

「うん。行ってらっしゃい」

「行ってきまーす」

美恵ちゃんは部屋を後にした。

「ねえ、高田さん」

「うん？」

仲居くんが話しかけてくる。

「どうしたの？」

気付き

「あのさ、広瀬と加藤さんって付き合ってるの？」

「えっ？さあ—どうかなあ。わかんないけど」

あたしは一生懸命知らないフリをする。

「昨日の態度と全然違うと思わない？」

「うーん。どうかなあ」

「広瀬って何でも早いからなあ」

「そうなの？知らなかった」

何でも早いのかあ。

いいような悪いような・・・

「まあ、良かったよ」

「良かった？何が？」

「・・・高田さんとこんなに話しできて良かったよ」

「っ・・・」

あたしはつい、無言になる。

だって。

急にそんなこと言われたら。

びっくりしちゃって何て言い返せばいいかわからないよ。

「昨日まで話を避けられてる感じがしたから。今日、こんな普通に話できるなんて思ってもなかったからさ」

「・・・」

「ねえ、ひとつ、聞いていいかな？」

「・・・うん。良いけど」

何故か胸の鼓動が高鳴る。

「どうして俺の事、避けてたの？」

やっぱり。

やっぱりこの事を聞いてきた。

言えないよお。

あたしの事を意識してるように見えたなんて。

言えるはずがない。

そんな困ってるあたしの姿を見て。

「言いたくないなら良いんだ。ごめん。困らせる事聞いて」

「ううん。こっちこそ、答えられなくてごめん・・・」

「でも俺、高田さんとちゃんとした友達になりたいんだ。

なんか、変な言い方だけど」

友達になりたいからこちらを見てたんだろうか。

よくわからないけど、そういう事だったなら、ちょっと嬉しいかも。

「うん。わかった。良い友達になろうね」

「ありがとう。嬉しいよ」

「こちらこそ」

そう言って、怖さがなくなったのか。

にこっ。

お互いの笑みを見詰め合う。

怖い人と思ってたけど。

もう大丈夫かも。

それにしても。

やっぱり仲居くんって格好良いなあ。

あの笑顔だって。

ずっと見てるだけでも。

頬が赤く染まっちゃいそう。

「ただいまー」

後ろから美恵ちゃんの声が聞こえる。

「恵利菜ちゃんも洗ってきなよ。すっごく気持ち良いよ」

「うん、ありがと。あたしは美恵ちゃんが起きる前に洗っちゃったから」

「そうだったの？それで顔がきらめいてるわけね」

「ふふ。そういうこと」

トントントン。

入り口のふすまを叩く音が聞こえる。

振り向いてみると、担任の先生が立っていた。

「朝の集いの時間だぞ。早く起きて外にでておけよー」

そういうと、先生はこの部屋を出て隣の部屋へ向かっていった。

「もうー。うっせえなあ。やっと寝付けると思ったのにー」

広瀬くんが布団から出てきた。

「やれやれ。着替えるか・・・」

ブツブツ言いながら着替え始めた。

「んじゃ、俺も着替えよっと」

そういつて仲居くんも着替え始める。

周りを見ると、他の男の子も着替え始めていた。

「恵利菜ちゃん、男の子たちが着替えるみたいだから、あたしたちは外に出てよ」

「うん」

美恵ちゃんが急に振り返って。

「広瀬くん」

美恵ちゃんが広瀬くんを呼ぶ。

「ん？どうしたの？」

「みんな着替え終わったら言ってよね」

「ああ、わかった」

「じゃあ」

そう言って、あたしたちは部屋の外に出ると。

ポンッ。

肩を叩かれた。

振り返ってみると、朝洗面場でお話した男の子が立っていた。

「よ、まだ外に出ないのか？」

「うん。まだ着替えてないから」

「そっか。じゃあね」

そういうとあたしに背を向けて外に出ていった。

あっ！

また名前聞くの忘れた。。。。

忘れがちなあたし。

またあった時に聞こっと。

．．．

ちらほらと男の子が部屋を出て行く中。

あたしたちはみんなが出て行くのを待つ。

その間美恵ちゃんと楽しくおしゃべりしていると、

ようやく広瀬くんが出てきた。

「おっす。もういいぜ。着替えなよ」

「わかった。ありがとう」

「じゃあ、先に行ってるから」

「うん。後でおいかけるね」

そう言うと、外に出て行った。

あたしたちは部屋に入り、着替え始める。

他の女の子たちも部屋に戻ってきて、着替え始めた。

「あ、ねえねえ。美恵ちゃん」

「ん？どうしたの？」

「あたしさあ、男の子とお話するの。少し慣れてきたみたい」

「やったじゃん。よかったね」

「うん、ありがと。これも美恵ちゃんのおかげだよ」

「あたしまだ何もやったつもりないけど」

「美恵ちゃんが一緒にいてくれるだけで心強いよ」

「そっか。それなら良かったよ」

「うん」

みんな急いで着替え終え。

「さて、いこっか」

「うん」

あたしたちは外に向かった。

．．．

朝の集い。

ラジオ体操して。

今日の予定を先生から改めて説明される。

今日の予定は、まず朝飯を取って、その後講義。

講義って言うのは、簡単に言うと学校の説明みたいなもの。

その後は昼飯。

昼食をとった後はハイキング。

それが終わったら夕食。

その次は映画鑑賞。

そして最後の締めメインイベントのキャンプファイヤー。

以上。

今日は結構色んな事があって大変そうな一日。

でも、がんばんなきゃ。

ねっ。

．．．

朝食をとって、オリエンテーションホールで講義を受ける。

すぐつまらない。

うとうとしているうちに終わり、時計を見るともう11時。

講義が始まったのは9時ごろだから、2時間位講義していたことになる。

その後に昼食をとって、今からハイキング。

行き先は、永楽ダム。

ハイキングにダムは似合わないと思うけど。

文句を言っても仕方ないし。

ちゃんとグループ行動しなきゃね。

「じゃあ、出発するぞー」

先生の合図とともに、みんなが歩き出す。

「恵利菜ちゃん」

「ん？」

振り向くと、美恵ちゃんと広瀬くんと仲居くんがいた。

「美恵ちゃん、一緒に行こうよ」

「うん。あたしは恵利菜ちゃんを誘いに来ただけど」

「あら。じゃあちょうど良かったね」

「よう、高田さん」

仲居くんが話しかけてきた。

「あっ、うん」

「加藤さんがこっちに来て言うから来ただけど、

高田さんも一緒になる予定だったのね」

「そうだったんだ？」

美恵ちゃんの方を見ると。

あたしに向かってウィンクしてきた。

これが美恵ちゃんの言っていたチャンスってやつ？

今こうやって友達として仲居くんを見ると。

やっぱり格好良くていい人にも見えてくる。

今考えると。

あんな風に迷う事なかったのに。

もっと早くから、仲居くんとおしゃべりしてたら良かったって感じちゃうなあ。

「高田さんってばっ」

ハッ。

妄想の世界から現実の世界へと帰って来る。

「あ、ごめん。何？」

「加藤さんと広瀬が何か忘れ物したらしくて、一旦戻るってさ。

後でおいかけるから先言っててだっさ」

「あ、そうなんだ。全然気付かなかった」

「加藤さんが高田さんにさっき言ってたじゃん」

「えっ？そうだっけ？」

「全然聞いてなかったんだなー」

「うん。ちょっと考え事してて」

「ふう。なるほどねえ。たとえば、恋の悩みとか？」

「えっ」

一瞬息がつまっちゃう。

見破られてる？

なんで？

まだ何も言ってないのに。

妄想を思い出すとあたしの頬が少し赤く染まる感じがした。

そんなあたしを見て。

「はは一ん。的中したかなー？」

仲居くんがあたしをおだてる。

「そっそんなんじゃないもんー」

「へえー。じゃあ、何考えていたの？」

「別に何だっでもいいじゃない？仲居くんには関係ないもんー」

あたしはムスツとした顔で横を向く。

すると、仲居くんが鼻で笑って。

「じゃあさ」

「・・・なに？」

一呼吸おいて。

「もし関係があったらどうする？」

「えっ」

まさか。

あたしの考えている事がわかったの？

どうして？

「なーんてね。冗談、冗談」

「もうー。冗談きついんだからー！」

何とかごまかせた。

・・・

？

いまの。

本当にごまかせた事になるのかなあ。

さっき、言葉つまっちゃったし。

もしかして。

バレたかも。。。

あたしって、本当の事を攻められると答えがつまっちゃうから。

「ねえねえ、高田さん」

「ん、何？」

「みんなに何て呼ばれてるの？」

「あたしは、まちまちだけど、恵利菜ちゃんって呼ばれるのが多いかな？」

「ふうん、そうなんだ。じゃあさ。俺もその呼び方して良いかな？」

「あっ、うん。別にかわまないけど」

「じゃあ、今度からそう呼ぶね」

「うん。仲居くんは何て呼ばれる事が多いの？」

「俺？俺は下の名前が尚希だから、"尚希"でいいよ」

「そっか。じゃあ、あたしも今度からそう呼ぶね」

そっか。

尚希って言うんだ。

良い名前。

それに。

格好良いし、声も落ち着いた感じで聞いてて何だか落ち着く。

今思ったら、もっと早く仲良くなってれば良かった。

...

はっ！

あたし。

もしかして・・・

好きになってる？

うそー。

そんなこと。。。

本当に・・・

本当？

もしそうなら。

この感じが。

"恋"って言う感じなの？

なんか。

話してて楽しいし、いつまでも側にいたいって感じ。

ううん。

それだけじゃない。

多すぎて上手く表現できないけど。

あたしの初恋の人は。

仲居くんだったなんて。

思ってもいなかった。

変わった恋

最初は。

すごく見詰められたりして。

すごく怖かったのに。

今、見詰められたら。

何だか、ドキドキする。

そんな感じなの。

あたしは、尚希くんが好きなのかも。

高校になって。

初恋が出来たんだ。

「どうしたの？」

「えっ」

「いや、なんか真剣な顔になってたから。どうしたのかなって」

「ううん。なんでもないよ」

「そっか。なら、良いんだけど」

！？

仲居くん。

いま、あたしを。

心配してくれたの？

だとしたら、凄く嬉しい。

そう思っただけで。

頬が真っ赤になりそうで。

今日一日中ドキドキが止まりそうにない。

こんなに恋愛がすごいものだななんて。

思ってもいなかった。

「恵利菜ちゃん」

美恵ちゃんの声が聞こえる。

「帰ってきたよー」

「お帰りー。あれ、広瀬くんは？」

「もうちょっとしたら来ると思うよ」

「そっかそっか」

美恵ちゃんがあたしの耳に手をあて、口を近づける。

[恵利菜ちゃん、どうだった？上手く話できた？]

[うん、出来たよ。あたしね、今気付いたんだけど]

[何に気付いたの？]

[あたしね、仲居くんのことが好きになっちゃったみたい]

[おー！そうなんだ！やったね！]

[これも美恵ちゃんが手助けしてくれたおかげだよー]

[そんな事ないよー。これは、恵利菜ちゃんの努力の印だよっ]

「何話してんの？」

こそこそ話ししているあたし達に尚希くんが不思議そうに質問する。

「ううん、別になんでもないよー」

「本当か？わかった！俺の悪口でも言ってたんだろー」

「そんな事言ってないよー」

「そうか？あやしいなあ。まあ、いいけど」

ダダダダッ。

後ろから走ってくる音が聞こえる。

「いえーい！」

広瀬くんだ。

「広瀬くん、おそーい！」

美恵ちゃんが叫ぶ。

「ごめんごめん、向こうで友達に止められてね」

「ふっ。しかたないなあ。許してあげるっ」

「そっか、サンキュー！」

美恵ちゃんと広瀬くんは仲よさそうにニコニコ話す。
そんな姿を見て、尚希くんがあたしの耳元で話しかけてきた。

[ほらな、加藤さんと広瀬。すごく仲がいいだろ？]

[うーん・・・どうだろ？]

あたしは知らないフリをする。

[絶対付き合ってるって。俺、そういうのは見破るの上手いから]

[そうなの？]

[うん。中学の頃だって、人が付き合ってるかどうか当てるのは凄く上手かったし]

自信ありげに言うので、少し試してみる。

[へえー、じゃあさ。あたしはどっちと思う？付き合ってるか付き合っていないか]

[えっ？恵利菜ちゃん？]

[うん。ズバリ、あたしは？]

[恵利菜ちゃんが付き合ってたら、俺は・・・]

尚希くんの声のトーンが低くなる。

[ん？]

[いや、そうだな。付き合っていない！]

[ほーほー]

[どう？あたってるでしょ？]

[うん、そうだね。あたってる]

[ほらなっ！俺は当てるの上手いんだよ]

尚希くんは得意げに言う。

[そうだね、さすがって感じ]

[だろ？]

「おい、何さっきからボソボソ二人の世界作ってんだよ」

広瀬くんが横から割り込んで来る。

「そういう広瀬こそ、人のこと言える立場じゃねえだろ」

「俺？俺は違うもん」

「何言ってるんだ。お前、加藤さんの事が好きなんじゃなねえのか？

はっきり言っちゃえよ」

「へえ。じゃあ、お前も高田さんに早く告白すれば？」

「えっ！？」

うっ。

つい、声を上げてしまった。

まさか。

尚希くんも。

あたしの事が好きなの？

本当に？

やだっ。

頬が赤く染まっちゃうよお。

こんな顔。

広瀬くんや尚希くんに見せらんないよ。

すごく恥ずかしいっ！

そう思うと。

あたしはその場にいる事が出来ず。

気が付いたら、その場から走って離れている自分に気付く。

後ろから広瀬くんと美恵ちゃんの声が聞こえたけど

あたしの足は止まらなかった。

．．．

どれくらい走っただろうか。

息が乱れて深呼吸も出来ない位走った。

あの場所を。

逃げちゃった．．．

今考えたら、どうせハイキングが終わればまた会わなくちゃいけないのに。
やだな。

広瀬くんのバカ。
どうしてあんな場所でそんなこと言うのよお。

あたし。
すごくドキドキしちゃって。

ほら。
今でも、ドキドキが止まらない！
走りすぎたってのもあるけど・・・
それだけじゃないもん！

息を切らしながら走るのを止め、トボトボと目的地へ一人歩く。
目の前には咲きに出発したもうひとつの男子グループが歩いていた。

ゆっくり歩くそのグループたちにあたしは追いつくと。
後ろを歩いていた男の子がこちらに気付き、声をかけてきた。

「やあ、どうしたの？きみは僕たちのグループじゃないはずだけど」

よく見ると、その男の子は洗面場で出会った男の子だった。
心配そうにあたしを眺める。

「うん、ちょっとね」

「グループからはぐれちゃったの？」

「まあ、そんなところかな」

「じゃあ、僕たちのグループに混ざる？」

「えっ、いいの？」

「うん。ひとりで歩いているのも寂しいだろうし」

「ありがとう。じゃあ、一緒に行かせてもらうね」

「うん。そういえば、今日は本当にきみと良く会うね」

「そうだね、洗面場でも会ったよね」

「もう2回も会話しているのに、名前をちゃんと聞いてなかったね。

名前はなんていうの？」

「あたしは、高田恵利菜だよ」

「へえー。恵利菜ちゃんって言うんだ。良い名前だね。

僕は神田信雄。よろしくね」

「こちらこそっ」

「ん・・・？」

神田くんがあたしを覗き込む。

「どうしたの？」

「いや、なんか息切れしてるみたいだから」

「あ、うん。走ってきたから」

「そうなの？誰かを追いかけてたの？」

「ううん。別に意味はないんだけどね」

「意味なく走ってたの？高田さんって面白いね。変わってる」

「変わってるでしょ」

なんとかごまかせた・・・かな？

まさか。

あんな事、いえるはずないもの。

「ねえ、高田さん」

「ん？なあに？」

「彼氏とか、いるの？」

「えっ！？どうして？」

いきなりの質問にびっくりする。

「いや、高田さんって可愛いからいるのかなーと思ってさ」

「いないけど・・・そういう神田くんは？」

「僕かい？僕は好きな人はいるんだけど、絶対に不可能な恋だから」

「そんな事ないと思うよ。何とかすれば、恋は芽生えるはずだよ」

「そうだといいんだけどね。でも、たぶん無理」

「好きな人って、この学校の人？」

「うん、そうだよ。僕と一緒にの中学だった人なんだ」

「へえー。頑張らなきゃね、お互い」

「そうだね・・・」

一瞬、沈黙が走った後。

「高田さん」

「ん？」

「僕の恋、よかったら手伝ってほしい！」

「へっ？あたしが？」

「うん。もし、良かったらで良いんだけど」

「でも、あたしは付き合った経験もないし、告白した経験もないから、
アドバイスできないと思うよ」

「うん。いいんだ。きみがいてくれるだけで、僕は落ち着くから」

落ち着く？

そんなの急に言われたらはずかしいよ。

「・・・あたしは何を手伝えばいいの？」

「あのね。今日、告白しようと思ってるんだ。そこで、手伝ってほしいなと」

「今日するの？どこで？」

「キャンプファイヤーが終わって、肝試しの時に告白しようかと」

「えっ！？肝試しなんてあるの？そんなの聞いてないよ～」

「うん。これは、オリエンテーション委員会で決定した事なんだ。
だからまだ発表してないんだよ」

「ううう。怖いのが手・・・組み合わせとかあるの？」

「組み合わせはあるんだけど、僕は通った人を驚かせる役だから、
誰かと一緒に回る事はないんだ」

「そうなんだ。じゃあどうやって告白を？」

「その人と一緒に驚かせる役をすれば、必然的に二人になる時間があるからね」

「なるほど」

「まあ、この恋愛は実らないけど、告白することによって諦めがつくから」

「・・・たしか、オリエンテーション委員ってとこの子だけが委員だったんじゃない？」

「うん、そうなんだ。もうわかったろ。僕が一体誰に告白するのか」

「もしかして、男の子？」

「・・・うん」

「え————っ！」

一瞬悲鳴を上げてしまった。

すると。

神田くんはあわててあたしの口を塞ぐ。

「もう、大きい声だしちゃだめだろっ」

「ごめんなさい。つい・・・」

「ここで、手伝ってほしい事がひとつ」

「・・・うん・・・」

あたしは息を飲む。

「応援して」

「えっ？応援でいいの？」

「うん。僕ね、中学2年の頃から、一緒のクラスになってよく遊んだりしてたんだ。

そして、中学3年の頃気付いたんだ。僕は広瀬くんの事がすきってことを」

「えっ・・・広瀬くんって、あたしと同じチームの広瀬くん？」

「うん。そうだとするよ」

ちょっと・・・

どうしよう。

広瀬くんは今、美恵ちゃんと付き合ってるなんて言えない・・・

いったいどうしたら・・・

「このことは、誰にも言わないでね」

「う、うん。わかってる」

「言わないって信じてるから」

「恵利菜ちゃん」

後ろの方で、美恵ちゃんの声が聞こえる。

振り返ると。

息を切らしてあたしの目の前まで全力で走ってきた。

「美恵ちゃん、どうしたの？そんなに慌てて」

「だって、恵利菜ちゃんが級に走っていくから追いかけてたんだよ」

「あっ、ごめん」

そうだ。

あたし、走って逃げてきちゃってたんだ。

神田くんの衝撃発言ですっかり忘れてた・・・

「どうしちゃったの？恵利菜ちゃん、急に逃げちゃって」

「あのさ」

神田くんがあたしたちに話かける。

「高田さん。グループの人が見つかってよかったね。じゃあ、僕は消えるよ」

そう言うと。

自分のグループに合流してあたしたちと逸れてしまった。

「誰？あの人」

美恵ちゃんが不思議そうに聞いてくる。

「あの方は、同じクラスの神田くん」

「へえー。いつのまに友達に？」

「今日、洗面場で顔洗っている時かな」

「そうなんだ。ところで、どうして急に走っていったの？」

「うん。広瀬くんが級にあんなこと言ってきたから。あたし、

びっくりしちゃってつい・・・」

「そうだったの。広瀬くん、お調子者だから。許してあげてね」

「うん・・・あたしがいなくなってから、何かあたしの事話してた？」

「広瀬くんが、ごめんて言っといてって言ってたよ」

「尚希くんは？」

「下向いてて、すごく暗い顔してた」

「そっかあ。ありがと」

「もうちょっとしたら、広瀬くんたちが来ると思うけど、どうする？」

「うん、待っとくよ」

「そっか。じゃああたしもそうするね」

あたしたちはトボトボとゆっくり歩き、広瀬くんたちが追いつくのを待った。
だけど、追いついてくる事なく、ダムの前まできてしまった。

・・・

ザァー――。

まるで滝のような音を立てて水を流す。

ダムって凄い勢い。

何もかも流し落としてくれそうな音。

あたしの悩みもこれで流せたらどんなに幸せな事だろうか。
そう考えながら見ていると。

広瀬くんたちが追いついて来た。

「高田さん」

広瀬くんがまじめな顔であたしを見詰める。

「・・・」

「高田さん、本当にごめんな。俺、言いすぎちゃって」

「ううん。もういいの。気にしてないから。こっちこそ

急に走って逃げちゃってごめんね」

「ありがと、高田さん。ほら、仲居も何か言えよ」

広瀬くんが尚希くんの肩を押す。

「あっ、うん」

「早く言えよ」

広瀬くんが尚希くんをせかす。

「ごめんね、俺、ついカッとなっちゃって。本当にごめん」

「もういいよ。だから、顔上げてよ」

「うん」

そういうと、尚希くんは顔を上げた。

「このダム凄いよ。みんなで見ようよ」

あたしがみんなにお勧めする。

みんなはダムを見学し始めた。

・・・

「・・・さ、帰ろうか」

「うん。そうしよう」

あたしたちはダムを見終え、帰路につく。
陰悪なムードは見学している間に消え、いつもの楽しい会話に戻っていた。

戻っている途中。

バタッ！
前のほうで誰かが倒れたのに気付く。

見に行ってみると。
そこには、横向きに倒れている神田くんが見えた。

「神田くん！」

あたしは、つい叫んでしまう。

「どうしたんだ？」

先生が駆け寄り、神田くんの様子を伺う。

「何かあったのか？」

「急に倒れて・・・」

あたしが先生に答える。

「そうか。じゃあきみたちはそのまま帰っていなさい。

先生が救援を呼ぶから」

「わかりました」

広瀬くんが返事し、あたしの腰を前に押す。
あたしは広瀬くんを押されるがまま、その場を後にした。
神田くんの事が気になり、後ろを向きながら歩く。

そんな様子を広瀬くんが見て。

「高田さん。神田って俺達のクラス？」

「うん。一緒だよ」

「そっか」

「もういいよ、あたし、自分で歩くから」

そういうと、広瀬くんはあたしの腰から手を離した。

神田くん。

ちゃんと肝試しの時までに体調が戻るのかなあ。

もし、戻らなかったら。

広瀬くんに告白・・・

出来ないんじゃ。

そう思うと、不安になる。

でも、広瀬くんは美恵ちゃんと付き合ってるし・・・

あー！

この先が見えない！

・・・

ブオオォーン。

神田くんを乗せたと思われる軽トラックが、あたしたちを横切る。

大丈夫かな・・・

「心配そうだね」

尚希くんがあたしの顔を伺いながら声をかけてくる。

「うん。ちょっとね」

「そんなに心配？」

「うん。心配」

「ふうん」

そういうと、尚希くんは無言になった。

どうして？

どうして無言になるの？

美恵ちゃんと広瀬くん。

そして、あたし。

尚希くん以外のメンバーは普通におしゃべりするけど、
尚希くんは一切口を開かなくなった。

結局、自然の家についても話そうとはしなかった。

あたしたちは部屋へ戻る。

途中で尚希くんはどこかに行ってしまった。

部屋に入るなり、広瀬くんが。

「どうしたんだ？仲居のやつ。急に元気がなくなってたみたいだけど」

広瀬くんが不安そうに言う。

「高田さん、何か心当たりある？」

「別に・・・ないけど。ただ・・・」

「ただ？」

「あたしが、神田くんの事が心配って言ったら、急に静かになっちゃったの」

「なるほどね」

広瀬くんが納得する。

「なに？何かわかったの？」

「ん？高田さんはまだ気付いてないの？」

「うん。何々？教えてよ」

「なっ、美恵ちゃん」

「うん。そうそう」

美恵ちゃんと広瀬くんはお互いわかったようなそぶりで
二人で納得してる。

「もうー。全然わかんないー」

「まあ、そのうちわかるさ」

「？」

わかんないんだけど。。。
どういう意味なんだろう。

美恵ちゃんが何か気付いたのか、窓の奥を見詰める。

「どうしたの？美恵ちゃん」

あたしが尋ねると。

「あれ、仲居くんじゃない？」

「えっ？どれどれ？」

あたしも窓から覗き込んでみると、そこには尚希くんと
女の子が立っていた。

「あの女の子、美恵ちゃん」

「うん。山下さん。山下千秋さんだね」

「やっぱり」

どうして山下さんが尚希くんと？

[俺にも見せろよ]

広瀬くんが割り込んで来る。

その光景を目にした広瀬くんが。

「何やってんだ？あいつら？」

あたしも目を細めて見る。

すると、山下さんが尚希くんに何かを渡していた。

プレゼント？

あっ！

受け取った・・・

山下さんが、走っていった。

「告白・・・されたんか」

広瀬くんがつぶやく。

！

尚希くんが動き出し、部屋へと向かって来る。

もう窓からは見えない視界に入ってしまった。

「何を渡されたんだ？」

広瀬くんが不思議そうにつぶやく。

数分後。

尚希くんが部屋に戻ってきた。

手にはもらったと思われるプレゼントが握られていた。

「仲居！」

広瀬くんが呼び止める。

「何かようか？」

「お前、さっき山下さんから何かもらってただろ」

尚希くんの目が点になる。

「！？どうして知ってるんだ？」

「いいからさ、何もらったんだよ」

「広瀬には関係ないだろ」

「知りたいじゃん。いいから教えろよ」

「やだね。何だっていいじゃないか」

そう言って、もらったプレゼントを自分のかばんに入れる。

プレゼントの影に、白い手紙のようなものも見えた。

「おい、仲居。その白い手紙は何だ？」

「これか？・・・まあここじゃなんだし、後で言うよ」

「おう。白状すんのか」

「ちがうよ」

「じゃあ、一体なんだよ」

尚希くんが"ふうっ"と、ため息をついて。

「そんなに知りたかったらこっち来いよ」

「おう」

広瀬くんが尚希くんの方へ近づく。

そして、その白い手紙だけを持って、外に出て行っちゃった。

一体、何て書いてあるんだろう。

「気になる？」

美恵ちゃんが聞いて来た。

「うん。ちょっとね。」

「本当にちょっと？」

「ううん。いっぱい・・・かな」

「あたしが後で広瀬くんに聞いといて上げるから心配しなくていいよ」

「うん、ありがと」

「んっ？」

美恵ちゃんが何かに気付く。

「どうしたの？」

「恵利名ちゃん。仲居くんのかばん、空いてるよ」

「あっ。本当だ」

尚希くんがチャックを閉め忘れたかばん。

花柄の包装紙に包まれたプレゼント。

赤いリンボに包まれている。

綺麗なリボン結び。

左右の長さが綺麗にそろってる。

大分練習したんだろうなあ。
たった一本のリボンをくくるだけなのに。

プレゼントの大きさは。
縦横10センチ位。
奥行きが20センチ位の少し大きめなプレゼント。

あたしたちがかばんの側によって見ていると。

「なにやってんだよ！」

広瀬さんと尚希くんが帰ってきてた。
尚希くんが慌ててかばんに近寄る。

「ごめんなさい。つい」
「中身、見てないだろうな？」
「うん。見てない」
「まったく。油断もスキもありゃしない」

そういつて。
かばんのチャックを閉めてしまった。

？
あれ？

さっきの手紙を持ってない。
かばんにも入れてなかったし。

どこいっちゃったの？
手紙は？

「俺、トイレ行ってくる」

そういつと、尚希くんは行ってしまった。

「広瀬くん」

美恵ちゃんが広瀬くんに近づく。

「ん？どうしたの？」

「さっきの手紙、何だったの？」

「さっきのか。・・・なんでもなかったの」

「なんでもないって？」

広瀬くんはやけに否定する。

「だから、どうでもいいだろ」

「えっ」

美恵ちゃんの行きが一瞬つまる。

「俺もトイレ行ってくるわ」

そう言って、この部屋を出て行っちゃった。

ペタン。

何かが倒れる音がした。

振り返ってみると。

そこには美恵ちゃんが跪いていた。

「広瀬くんが・・・」

「美恵ちゃん・・・」

「初めて教えてくれなかった・・・」

「そりゃあ、そういうこともあるよ。人間だもん」

「でも、凄く悲しい・・・心が痛む・・・」

「・・・たしかに・・・」

広瀬くん。

一体何だったの？

美恵ちゃんにも言えないこと？

そんなに言えない事が書いてあったの？

わかんない。
知りたいよお。

素敵なオリエンテーションが。
幻へと消えていくように。

高校生活始まって即効。
こんなことが起きるなんて。
恋愛ってこんな疲れるものなんて。
思ってもいなかった。

もっと楽しいものだと思ってたのに・・・

こんな状態。
一体、いつまで続くの？

早く抜け出したい！

結局。
広瀬さんと尚希くんは。
部屋へと帰ってくる事はなかった。

キャンプファイヤー

時間は流れ。

夕食の時間も過ぎ。

映画鑑賞の時間となった。

「結局、帰って来なかったね」

美恵ちゃんがつぶやく。

「うん。もう夕食の時間も終わって映画鑑賞の時間になってるのにね」

「うん・・・」

たしかに。

誰に聞いてもあれからの広瀬くんと尚希くんを見た人はいなかった。

夕食も食べに来なかったし。

先生はその事を知り。

自然の家の付近を捜しているけど。

まだ見つかっていないみたい。

そうそう。

神田くんね。

熱が38.8度あったの。

なのに、先生に言わないで無理にハイキングに行ってたから。

倒れちゃったってわけ。

先生がキャンプファイヤーにも肝試しにもだれないって。

どうして無理してハイキング行ったんだろう。

あたしにはわからない。

パッ。

部屋の明かりが消え。

映が始まる。

あたしの席の右には尚希くんが座るはずの席も。

ポツカリと空間を作っている。

左側の席もそう。

広瀬くんが座る席のはずだった。

でも。

左右どちらを見ても空間が開いている。

結局、映画が終わっても帰ってこず。

ついには、キャンプファイヤーの時間になってしまった。

あたしたちはまず、体育館へと向かう。

端の方で誰か二人座っている。

目を細め、良く見ると。

そこには広瀬くんと尚希くんが座っていた。

「美恵ちゃん！広瀬くんがあそこに座ってるよ！」

「えっ？」

あたしが座っている所を指さす。

「本当だ。広瀬くんだ」

「一体どこに行ってたんだろうね」

「本当だよ。あとで聞き出してやるんだから！」

美恵ちゃんのはしゃいでる。

ザワザワと次々に体育館へと人が入っていく。

あたしたちが入ってくるのに気付くと、広瀬くんたちがこちらに気付き。

こちらに向かって歩いてきた。

「いやー！俺達トイレすげー長いから」

頭をかきながらごまかしてる。

「嘘ばかり！あたし、凄く心配しちゃったんだからね！」

美恵ちゃんが半泣きの顔で言うと。

尚希くんが慌てて。

「ごめんな。心配かけちゃって」

尚希くんの口から思ってもいない言葉が出てきて。

あたしったら、啞然。

まさか、尚希くんから真剣な顔でこんなこと言われるなんて思ってもいなかったから。

尚希くん。

本当に反省しているみたい。

それに変わって広瀬くんは。

全然反省の顔をしてなかった。

「どこ行ってたよ！」

美恵ちゃんが深く追求する。

「ん？だから、トイレ」

まだシラを切ってる。

「嘘つき！本当の事言って！」

「わかったよ、後で言うから」

「本当に？」

「本当に」

「・・・わかった。後でちゃんと聞くからね」

「わかったってば」

「おいっ！」

尚希くんが焦ったように割り込む。

「広瀬、お前、本当に言うのかよ」

「おう。こんなに追求されたら、言うしかないだろ」

「まあ、広瀬の問題だから俺はどっちでもいいけどさ」

「ねえ、尚希くん」

あたしは尚希くんに問いかける。

「恵利菜ちゃん、どうしたの？」

「あたしにも、教えて？」

「えっ、教えるの？」

「うん。教えて？」

「広瀬、教えてもいいのか？」

尚希くんが広瀬くんに聞く。

「うーん。だめ」

「どうしてー」

「今は教えられないんだ。時期が来たら、俺から話すよ」

「えー」

「と、言うわけなんだ。ごめんね、恵利菜ちゃん」

尚希くんがごめんねポーズしながらあたしに言う。

「ううん。広瀬くんがそういうなら仕方ないし・・・」

でも。

正直言うと。

がっかり。

美恵ちゃんだけが聞けるとか。

いいなあ。

どんなことだったんだろう。

そうだ。

後から美恵ちゃんから聞けばいいんだ。

「静かにー」

先生の掛け声と共に、ざわめきが少しずつなくなっていった。
静かになると、先生はキャンプファイヤーでの注意などを話し始めた。

「恵利菜ちゃん」

横にいる尚希くんが話しかけてきた。

「あのさ、俺達さっきまで自分達の部屋にいたんだよ」

「えっ？でも、それは夕食の時と映画鑑賞の時間の事でしょ？」

「うん。そうだけど」

「その前はどこにいたの？」

「その前かい？その前はトイレにいたよ。でも、先生がそこには
探しに来なかったから見つからなかったんだ」

「そうだったの」

「うん。それだけは教えとくね」

「それだけでも、教えてくれて嬉しい。ありがとう」

「全体、起立！」

先生の声が体育館中に響き、あたしたちの会話を切り裂く。

ガサササ。

みんなが立ち上がる。

あたしは、みんなより少し遅れて立った。

「後ろから出発しなさい」

先生の号令と共に、みんなが動き出す。

あたしたちも、その波に乗ってキャンプファイヤー場へと移動する。

尚希くんとの話はそこで中断されてしまった。

ここまでの話をつなぎ合わせてみると・・・

急に真剣な表情になった原因は、あの白い手紙からだよね。

そして、話の内容からあの白い手紙は広瀬くん宛てのラブレター。

と、考えられる。

でも、問題は どうして尚希くんに手渡されたか。
だよね。

しかも。
尚希くんは広瀬くん宛てと知っていた。
そうでなければあの時のプレゼントと一緒に手紙を見せなかったはず。

気になるのが。
どうしてプレゼントは広瀬くんに渡らなかったのか。

もし山下さんが渡したプレゼントと手紙なら、広瀬くんに渡すはず。
でも尚希くんのかばんに今もプレゼントは入ったまま。

一体、あの手紙はいつから尚希くんが持っていたものなんだろう。
山下さんが渡した手紙じゃないのかな？

あーもう。
ダメで元々。
あとで尚希くんに聞いてみよう。

．．．

そんな事を考えていると。
あっという間にキャンプファイヤー場へ到着した。

みんなが炎を囲むかのようにして円に座る。

あたしの右には美恵ちゃん。
その美恵ちゃんの右には広瀬くん。

あたしの左には尚希くんと．．．
その隣には生憎なことに山下さんがいる。

尚希くんの隣が山下さんじゃ、尚希くんと話すこと出来ないよ。

。。。

そういえば。

山下さんってあの時、尚希くんに告白したのかなあ。

それとも、ただプレゼントを渡しただけ？

どちらにしても。

山下さんがこんな大胆な事する人とは思わなかった。

オリエンテーション先まで来て告白とか。。。。

せめて、オリエンテーション後にしてくれたら今だって尚希くんと話しやすいのに。

まあ、これはあたしの願望なんだけどね。

パチパチパチパチ。

メラメラと火花が飛び散る。

「わあー。綺麗。ねえ、見てみて」

山下さんが尚希くんに話かける。

すると、尚希くんが。

「ああ、綺麗だね。星も見えているし」

ズキン。

尚希くんの声に反応して、あたしの胸がキュンと痛む。

あたしったら。

山下さんに影響されていたらダメ！

もう、山下さんがいても関係ない！

あたしは勇気を出して。

「尚希くん！」

強く呼びかけた。

「ん？どうしたの？」

「あのさ、さっきの話の質問したいんだけど、良い？」

「まあ、話せる限りね」

「うん」

あたしは山下さんの方を見る。

都合のいいことに、山下さんはキャンプファイヤーに見とれていた。

今がチャンス！

「あのね、あの白い手紙の事なんだけど」

「ああ、あれね。あの手紙の内容なら答えられないよ」

「そうじゃなくて」

「？じゃあなに？」

「あの手紙、人からもらったものでしょ？」

「うん。そうだけど」

「いつから持ってたもの？」

「あれかい？あれは昨日からかな」

「昨日の、いつ？」

「何でそんな事を聞くの？まさかその現場を見てた？」

「いや、見ていなかったけど。どうしても教えてほしいの」

「ふうん。あれは昨日のバスの中で渡されたんだ」

「昨日のバスの中？ということは、この自然の家に来るときのバス・・・だよな？」

「ああ、そうだよ」

「そっか。ありがと」

尚希くんが少しため息をついた後。

「？あのさあ」

「うん」

「出来ればさ、あまり拘わらないでほしいんだけど」

「どうして？」

「どうしても。相手も傷づくだろうし」

「そっか、ありがと。教えてくれて」

「俺に礼言ったって何もならないけどね」

そっか。

手紙を手にしたのは、来る途中のバスの中。

もし、あの手紙が広瀬くんへの告白の手紙だったとすれば。
自然の家についてからでも、直ぐに広瀬くんへ渡せたはず。

でも、あの手紙を広瀬くんに渡したのは次の日の朝だった。
ということは。

広瀬くんの悪口を書いてあったとか？
それはないか。

悪口だけであんなに悩む事はないし。
うーん。

話の内容が見えて来ない！

あのかばんに閉まってあるプレゼントも気になるけど。
怒られたから、これ以上聞けないし。

もう全然わかんなくなっちゃったよお。

重い一言

キャンプファイヤーの炎もだんだん小さくなり、数分後には消えてしまった。

神田くん。

やっぱり来なかった。

どうするのかな。

広瀬くんに告白。

明日にでもするのかな。

「さあ、今からが今日のメインイベント。肝試しだー！」

先生が怖そうな声でみんなを怖がらせようとする。

でも、さすがにこの年では誰も驚こうとはしない。

「ペアの組み方を説明するぞ。今からくじ引きを行う。

1番の人は2番の人と。3番の人は4番の人とといったように組むんだ。

さあみんな並んでくじを引いてくれ」

先生の言われるがまま、くじ引きを引く。

あたしは12番だった。

広瀬くんが後ろからあたしの番号を覗き込んでた。

「おっ、俺とペアじゃん」

そう言って13番のくじをあたしに見せる。

「本当だね。よろしくね」

尚希くんは誰とペアなのか気になり、尚希くんを探す。

すると、山下さんとくじを見せ合って話している尚希くんがいた。

尚希くん、山下さんとペアだったんだ・・・

あたしにとって一番一緒にしたくないペアなのに。

となると美恵ちゃんは？

キョロキョロと美恵ちゃんを探すと。

同じグループだけど話をした事ない人とペアだったみたい。

「いいか、いつ出発するかは二人の自由だ。まあ、通る道は一緒だけどな。よし、出発したいやつからしていいぞ」

先生がそういうと、それぞれのペアは出発しだした。

「俺、早く帰りたいから行こうぜ」

広瀬くんがあたしを急かす。

「ねえねえ、広瀬くん」

「ん？なに？」

「たしか、人をびっくりさせる役なんじゃないの？」

「高田さん。それ、何で知ってるの？」

「ある人から聞いたの」

「そっか。神田くんが倒れて出れなくなったから、脅かすのは中止になったんだよ」

「そうなんだ」

「そういうこと。さあ、行こうぜ」

「うん」

あたしたちはそんな話をしながら出発する。

周りを見渡しても木ばかり。

あたしたちは、その木と木の間の一本道を歩く。

本当に真っ暗。

急にこうもりなんか出たら。

大きな声で悲鳴あげちゃうかも。

そう思うと。

ブルブルと震えちゃう。

そんなあたしを広瀬くんが気付き。

「どうしたの？震えてるけど、寒い？」

「ううん。寒くないんだけど、真っ暗だから怖くて・・・」

「へえー。高田さんって案外怖がりだったりするんだね」

「うん・・・」

「ここでさあ、もしオバケが出たらどうする？」

「悲鳴上げて気絶しちゃうかも」

「ははっ。高田さんそういう所、可愛いね」

「そう？ありがと」

そういえば、美恵ちゃん手紙の事聞いたのかな？

「ねえ、広瀬くん」

「ん？」

「美恵ちゃんに手紙のこと話したの？」

「いや、まだだけど」

「一体あの手紙に何書いてあったの？」

「俺、あの手紙読んだ時すごくびっくりしちゃったよ」

「びっくり？どうして？」

「俺、こんな事初めてだもん」

「そうなの？」

「うん、こんなのは初めてだね。中学の頃もこんな事なかったし」

「そうなんだ」

以外。

広瀬くんならラブレターの1枚位、今までにもらっても

おかしくないと思うんだけどな。

「まあ今は詳しい事言わない事にしとくよ。言いふらしても相手に悪いし、
第一、本人は言いまわされるの望んでないだろうからね。

まあ、相手が言っても良いつて言ったら教えてやるよ」

「本当に？」

「ああ、本当。まあ、良いつていうかどうかは別としてね」

「むー」

あたしは、つい頬を膨らませる。

「おっ、自然の家が見えてきたぞ。さっさと帰って寝ようぜ。」

今日は俺くたくただよ」

「そうだね。今日は色んな事したもんね」

「ふわあああ。あくびが出てきた」

「ふふっ。大きなあくび」

あたしたちはそんな会話をしながら、自然の家へと付いた。

あの時、相手が言っても良いつて言ったら教えてくれるって言ったけど。
普通、良いよだなんて言う人いないよね。

その告白の結果がOKなら、良いつて言うかもしれないけど。
振られちゃうのなら、なおさら言わないでって言うに決まってる。

やっぱり、広瀬くんから直接聞ける事はなさそう。

そんな事を考えてると。
早く部屋に戻ってから数分たった後位に美恵ちゃんたちが戻ってきた。

もちろん、山下さんも。

広瀬くんは・・・
男の子の寝るゾーンを見ると、既に疲れきって寝転んでいた。

その光景を尚希くんが見ると。

「広瀬、もう寝てやがる。早いなあ」

ぶつぶつ言ってる。
美恵ちゃんも寝てる姿を見て。

「あーあ。寝ちゃってるんじゃ、手紙の事聞けないじゃん。
仕方ない、明日きこっと」

美恵ちゃんが少し悔しそうに言ってる。

「今日もトランプするとか言ってたのにな。余程疲れたんだろう」

尚希くんがボソッとつぶやく。

「加藤さん、あんまり手紙の事ガツガツ聞いてあげない方が良いよ」

悔しそうにしている美恵ちゃんに尚希くんが忠告する。

「どういう意味？」

「あいつ、手紙の事でまいてるから。こんな事初めてだって言ってたし、俺も同じ立場だったら戸惑うわ」

「戸惑う？自分は好きじゃないからって事？」

「うーん。そういうのとはちょっと違うんだなあ」

！？

あたしの頭の中でパッとひらめいた。

広瀬くんにご告白しようとしていた人がもう一人いた！

好きとかじゃなくて、戸惑うこと。

それは。

「尚希くん」

「ん？」

「あの手紙、ズバリ男の子からのラブレターでしょ」

尚希くんが困った顔をする。

「・・・まあ、その通りだよ。よくわかったね」

観念したのか、小さな声で回答をくれた。

「やっぱり・・・」

「俺が言った事、言わないでくれよ」

「うん」

間違いない。

あのラブレターの主は、神田くんだ。

「高田さんー」

山下さんがあたしを呼ぶ。

山下さんから呼ばれるとか、ちょっと抵抗が出る。

「何？山下さん」

「外で男の子が呼んでるよ」

「男の子？誰だろ」

「神田くんっていう子。知ってる？」

「あっ、うん。知ってる。ありがと」

山下さんに礼を言って、部屋の外に向かう。

そこには、言われたとおり神田くんが立っていた。

神田くんはあたしが出て来たのを見つけて。

「あ、高田さん」

「どうしたの？神田くん。体調大丈夫？」

「うん。今は少し楽になったよ。それより、ちょっと来てもらっていい？」

「うん、いいけど」

あたしは神田くんに案内されるまま、人が少ない所へ移動する。

神田くんは周りを見渡し、知っている人がいないことを確認してこちらに振り返る。

「あのね。実は僕、昨日仲居くんの手紙を託けてあったんだけど、その事知ってる？」

やっぱり。

あの手紙は神田くんだったんだ。

「うん。尚希くんが持ってた白い手紙の事でしょ？」

「うん。ちゃんと広瀬くんに渡ったかな？」

「尚希くんが今日の朝、渡してたよ」

「そっか。あの手紙には、キャンプファイヤーの時、話しがしたい事があるって書いてただけど、僕今日倒れちゃっていけなくなっちゃったから」

「そうだったね。あたしも凄く神田くんの事が気になってたよ」

「ありがとう」

神田くんが息詰まる。

「神田くん？」

「・・・僕ね、仲居さんと広瀬くんは、中学からの友達なんだよ」

「そうなんだ？」

「うん。とくに、広瀬くんとは結構仲が良くてね。仲居くんは中学からだけど、広瀬くんは小学校の時から友達だったんだ」

「そうだったんだ」

それで仲居くんを中継して手紙を渡してって言えたんだ。

「今回がラストチャンスだと思ってたんだけど、伝えられなかった。

でも、このまま言えず終いじゃ嫌だし、もう一度誘って
今度こそ自分の口から伝えたいんだ」

「そっか・・・そんな大事な場面を控えていて、

どうしてハイキングに出席したの？休んでも良かったんじゃない？」

「そうだね。でもね、折り返し地点のダムまで行けば、
広瀬くんと会えると思ったから。話す事はなくても、
その姿が見れたら良いなと思って」

「そうだったんだ・・・でも、熱が出てたならそこまで頑張る必要がないような」

「そうだね・・・普通ならね」

「普通なら？」

どういう意味だろう。

さっきから神田くんの言い方に何か引っかかる。

「僕ね、このオリエンテーションを最後に、引っ越すことになってるんだ」

「え———!？」

びっくりして大きな声を上げてしまう。

神田くんはあたしのそんな姿を見て、シーーっと口元で人差し指を立てる。

「ごめん、つい」

「僕ね、オリエンテーションが終わったら直ぐに東京に行く事になってるんだ」

「じゃあ、どうしてこの学校へ入学したの？意味がないような」

「そうだね。でも、入学するまでは東京に行く予定にはなってなかったんだ。

東京行きが決まったのは僕がこの高校に入学が決定してから数日後。

父さんが東京に転勤する事になってね。僕、父子家庭だから、

ついていくしかないんだ」

あたしは啞然となる。

まさか、こんな事情だなんて思ってもいなかったから。

「・・・だからこそ、このオリエンテーションが僕が伝えられる

最後のチャンスなんだよ」

「そっか・・・直ぐに引っ越すのに、よくオリエンテーションに来れたね」

「うん。僕の父さんがね、"出来るだけ友達を作ってこの大阪にいたときの思い出に下さい"って
。

そういつてくれたから、ここに来たんだ。結構、父さんも僕の事考えてくれててね」

その話を聞いて。

瞳からジワッと涙が立ち込めてくる。

だって。

こんなに人を好きになって。

一生懸命今まで思っていたことを今、告白しようと頑張ってるのに。

あたしの恋なんか。

神田くんの手にも及ばない。

神田くんは。

もう、本当の恋を見つけている。

男の子が男の子を好きになるって変な事だと思っていたけど。

変な恋と片付けて良い物じゃないと思った。

恋は真剣なら。

たとえ男同士でもお互いが良いならそれも有りだと思った。

人を愛したら、新たな自分の始まり。

愛せば愛すほど。
新しい自分が生まれる。

そう思えば思うほど。
涙がポロポロと流れ落ちちゃう。

ヒックヒックと涙をぬぐうあたしを見て。

「高田さん、どうして泣くの？」

神田くんが不安にたずねて来る。

「だって・・・だって・・・」
「まさか、僕の事心配してくれたの？」

あたしは泣きながら。

「うん・・・だって、かわいそうなんだもん・・・神田くん・・・」
「ありがと。高田さんって凄く優しいんだね。僕、高田さんに相談して本当に良かったよ」
「あたし・・・出来る事なら手伝うから・・・」
「本当にありがとう。僕、高田さんの・・・」

ガタンッ！！
壁が強く叩きつけられた音が後ろから聞こえた。

振り返ってみると。
そこには、尚希くんが立っていた。

尚希くんは、あたしが泣いている姿を見ると。

「おい、神田！てめえ、何泣かしてんだよ！」

ズンズンと神田くんに迫り寄る。
尚希くん、神田くんがあたしを泣かしたと勘違いしてる！

「えっ！？僕、何もしてないよ」
「あーん？じゃあなんで恵利菜ちゃんが泣いてるんだよ！お前が泣かしたんだろ？」

「嘘つくんじゃねえ！」

「本当だよ、僕何もしてない。高田さんが一人で泣き始めたんだよ」

「てめえー！嘘つくのもいい加減にしろ！」

尚希くんが神田くんに手をあげようとした。

「尚希くん！違うの！本当にあたしが勝手に泣いちゃったの！」

だめ！

尚希くんは興奮してあたしの声が届いてない！

止めなきゃ！

「尚希くん！」

あたしは尚希くんを抱きついて止めに入った。

「離せよっ！」

バンッ！

「キャッ！」

あたしは尚希の力に押され、強く壁に叩きつけられた。

激痛で立っていることが出来ず、壁に寄りかかるように滑り落ちる。

尚希くんが。

あたしに暴力振るうなんて。

「痛・・・」

神田くんが、あたしの姿を見て。

「高田さん！」

「あ・・・」

尚希くんがあたしの姿を見て、我に返ったかようで、動揺し始める。

「仲居くん、キミはなんて事を！」

「ご・・・ごめん。恵利菜ちゃん、大丈夫？」

あたし・・・

尚希くんに突き飛ばされたショックで。

何が何だかわからなくなっちゃって。

この雰囲気の中でいるの。

たえきれなくって。

「尚希くんのバカッ！嫌い！」

そう言って、痛む体を自分で支えながら、その場を走って逃げてしまう自分に気が付いた。

尚希くんが追いかけてくる様子もなく。

・・・

あたし、尚希くんの事。

嫌いじゃないのに・・・

"嫌い"って言っちゃった・・・

気が動転しちゃって、言葉を選んでる余裕がなかった・・・

フッと気付くと。
あたしは外に出て来てしまっていた。

運動靴もはかずに。
スリッパで。

先生はまだ肝試し会場から帰って来ていない。
まだ肝試しが終わってないからだと思うけど。

何人かずつ、肝試しを終えて帰ってくるペアが目に入る。

あたしは草木の間に隠れて。
一人で自分の気がおさまるのを待った。

．．．

数分後。
尚希くんや神田くんがあたしを探す声が聞こえる。

あたしは名乗り出ることなく、その場で身を潜めた。

近くまで声が聞こえたけど、違う場所を探しに言ったのか、
次第と声は遠ざかっていった。

それから数分がたち。
あたしの気がようやくおさまってくる。

ここで隠れていても仕方ないし、部屋に戻ろうか考えていた時。

ポンッ。
ゆっくりとあたしの方に誰かの手が添えられる。

振り返ってみると。
そこには心配そうな顔をしながらあたしを見詰める広瀬くんがいた。

「広瀬くん．．．寝てたんじゃないの？」

「仲居に起こされてね」

「そっか・・・」

「それはそうと、何処に行ったかと思えば、こんな所で隠れてたんだね」

「うん・・・気を落ち着かせようとね」

「そっか。ところで、何があったんだ？」

「尚希くんから聞いてないの？」

「うん。探すようにしか頼まれてなかったしさ」

「そうだったんだ。心配かけてごめんね」

「いいよ。で、どうしたの？」

「うん・・・」

説明しようとしたけど、一瞬で声が止まる。

神田くんが広瀬くんの事をあたしに話していた時に泣いちゃったんね。

広瀬くん本人になんて説明出来ない。

あたしはどう答えようか悩んでいると。

広瀬くんは悩んでいるあたしの顔を見て。

「言えない事情だったならいよ。無理に聞こうとは思ってないから」

と。

あたたかい言葉をかけてくれた。

「ごめんね、本当に」

あたしは、ただ謝る事しか出来なかった。

「うん。気が向いた時にでも言ってくればいいから」

「広瀬くん・・・」

あまりの広瀬くんの暖かい言葉。

そして、優しい笑顔。

こういう一面がある広瀬くんだから。

神田くんは好きになったんだろうな。

神田くんだけじゃなく、美恵ちゃんもきっと。

もし神田くんが女の子で、美恵ちゃんより先に会っていたら。
あんな辛い思いをしなくて済んだかもしれないのに。

そんな事を考えると。
何故か、また瞳から涙が立ち込めてきて。
頬をさするかのよう流れ落ちる。

広瀬くんはあたしの姿を見て。

「何のことで泣いてるのか分からないけど、泣くんだったら
思いっきり泣きなよ」
「えっ・・・」
「中途半端で泣き止んだ方が、もっと悲しくなるから」

そう言われた途端。
涙腺の緊張がなくなったのか。
涙が止まらなくなった。

すると。
広瀬くんはあたしを慰めるかのように。

スッと体を広瀬くんの胸に引き寄せられ。

あたしを。
暖かく。
そして、優しく。
抱いてくれた。

・・・

どれくらい泣いただろうか。
止まらなかった涙のせいで、あたしの涙で広瀬くんの服は少し湿っていた。

「ごめんね。ありがとう。もう大丈夫」
「そっか」

そう言って、寄り添ったあたしの体をゆっくり起こしてくれる。

「少しは落ち着いた？」

「うん。ありがと」

「よしよし。そんじゃ、部屋に戻ろっか」

「うん」

あたしたちは立ち上がり、部屋へと戻った。

．．．

部屋に戻ってみると。

尚希くんがあたしたちを見て。

ダダダッと近寄ってきて、頭を深くあたしに下げる。

「さっきは、本当にごめん。俺、勘違いしてた」

頭を下げっぱなしにする尚希くん。

勘違いって言う事は、神田くんの話を信じてくれたのかな。

「うん、もういいよ。大丈夫だから」

「本当にごめん！」

「もう大丈夫だから、顔上げて？」

そう言うと、ゆっくりあたしの様子を伺いながら顔を上げる。

「二度とあんな事しないから。本当にごめん」

「．．．わかった。もういいよ」

「ありがと」

尚希くんの顔が少し緩んだ。

「神田くんとは仲直りしてくれた？」

「神田くん？ああ、仲直りしたよ。俺ちゃんと謝った」

「そっか。良かった」

広瀬くんがきょろきょろと周りを見渡し。

「あれ？加藤さんは？」

尚希くんに尋ねる。

「ああ、加藤さんね。さっきまで部屋の外を二人を探しに行ってくれてたんだけど、戻ってきたと思ったら何か急に雰囲気が変わっちゃって、寝ちゃったよ」

「雰囲気が変わった？どういうこと？」

「うーんと。機嫌が悪いというか、険悪そうな顔してたけど、今日色々ハードスケジュールだったし、疲れちゃったのかも」

「ふーん。どうなってんだ？わけわかんねえな」

広瀬くんが頭をかきながら悩んでる。

あたしも。

もちろんの事だけど、どういうことかよくわからない。

「多分、探し疲れちゃったのかも」

「そうかもな。まあ明日になったら分かる事だし、俺たちももう寝ようぜ」

「そうだね。今考えてもわかんないしね」

「んだ」

各自、自分達の布団へ入ると。

パチッ。

タイミングよく、消灯の時間になり。

あたり一面、暗闇の世界となった。

今日は、色々な事があったな。

明日の今頃には。

自分の暖かい布団に入ってるんだろうな。

美恵ちゃん。

一体、どうしたんだろう。

そんな事を考えながら。

あたしは眠りについた。

この時はまだ。

まさかオリエンテーション最後の日に。

こんな事が起きるなんて、思ってもいなかったんだけど・・・

怒っている理由

まぶしい閃光が顔中に立ち込める。
その閃光に導かれるかのように。
あたしは目を覚ました。

一度、大きく伸びをして。
一呼吸した後、自分の腕時計を見る。

時刻は、5時20分。
起床の時間まであと40分は残ってる。

昨日と一緒に、洗面場へと向かう。

すると、こちらも昨日と同じように、神田くんが立っていた。

「おはよう、神田くん」

あたしから話しかける。
神田くんはあたしの掛け声に気づき。

「おはよう。昨日はごめんね」

「ううん、いいの。こちらこそ、昨日は本当にごめんね。

心配かけちゃって」

「ううん。そんなことはないよ」

「・・・今日、オリエンテーション最後の日だね」

「そうだね・・・」

「今日、告白するの？広瀬くんに」

「うん。今日しか残り時間はないからね」

「問題は何処ですか、だよね」

「実はもう決めてるんだ」

「そうなの？」

「うん。飯盒炊爨の時にしようかなとね」

「飯盒炊爨・・・いいねそれしか時間なさそうだもんね」

「うん。それでね」

「？」

神田くんがごそごそと小さなバッグをあさっている。

「これを広瀬くんに渡しておいてほしいんだけど、いいかな？」

そういつて、スツと手紙を差し出してきた。

「あたしでいいの？」

「うん。ごめんね、迷惑かけちゃって」

「ううん。そんなことないよ」

差し出された手紙を受け取る。

「本当に高田さんには感謝してるよ」

「感謝だなんて。なんか照れる・・・」

「あははっ。それじゃ、お願いね」

「うん。まかしといて」

「それじゃあ」

神田くんは手を振りながら洗面場を後にした。

神田くんが視界から見えなくなるのを見送った後。

あたしは洗顔と歯磨きをチャッチャと済ませる。

鏡で綺麗になったか確かめたあと、直ぐに部屋へと戻った。

・・・

部屋に戻ると、複数目覚めている人達がいた。

美恵ちゃんはまだぐっすり眠っている。

広瀬くんを探すと。

「ふあああああ」

あくびしながら伸びをする広瀬くんがいた。

「むにゅむにゅ・・・」

目をこすりながら半分寝ぼけてる。

すかさず広瀬くんに近寄る。

広瀬くんも近づいてくるあたしに気付いた。

「おはよ、高田さん」

「おはよ。広瀬くん」

「相変わらず起きるの早いね」

「うん。いつもの習慣かなー」

「へえー。いつもこんな時間に起きてるんだ」

「そそ。女の子は朝は大変なのよ」

「ふーん」

そう言いながら、また目をこする広瀬くん。

「あのね、広瀬くん」

「ん？」

あたしは広瀬くん到手紙を差し出す。

「なにこれ？」

「これ、広瀬くんに」

「えっ？もしかしてラブレター？」

「うん。あたしからじゃないんだけど」

「・・・誰から？」

「その、神田くんから」

「・・・」

広瀬くんは困った顔をしながら。

「まったく、言いたい事あるなら自分で言いに来いっつーの」

そう言って手紙を受け取る。

「また後で見とくよ」

「うん」

広瀬くんは立ち上がり。

「んじゃ俺、顔洗って来るわ」

「うん」

広瀬くんは部屋を後にしようとした時。

「あっ！」

「ん？」

あたしの声に広瀬くんが立ち止まる。

「タオルまた忘れてるよ」

「おお、まずぶぬれで帰ってくるハメになる所だった」

広瀬くんは自分のかばんからタオルを出し。

「さんきゅ。んじゃ言ってくるわ」

「いてらっしゃーい」

広瀬くんは部屋を後にした。

その後、直ぐにポンッと肩に感触が走る。

少し驚いて振り返ってみると、尚希くんがいた。

「ねえ、恵利菜ちゃん。さっきの手紙何？」

どうやら尚希くんは現場を見ていたみたい。

「あれね、神田くんからの手紙」

「ああ、そうなんだ。なんだ、てっきりラブレターを渡したのかと思ったよ」

「まさかっ。そんな大胆な事しないよー」

「そっか。それにしても、男からもラブレターもらえとか、

ある意味大変だな」

「そうだね」

「まあ、恵利菜ちゃんのラブレターじゃなくて良かったよ」

「えっ？どういうこと？」

「広瀬の事が好きなのかと一瞬思っちゃったよ」

「全然そんなことはないよー」

あたふたと手振りしながら誤解を解く。

広瀬くんには美恵ちゃんがいるし、あたしは・・・

「そういや、今日でオリエンテーション最後か」

「そうだね。早かったねー」

「だなー。俺、このオリエンテーションで一番印象に残るのは、ズバリ・・・」

「ズバリ？なぁに？」

「ズバリ・・・恵利菜ちゃんと友達になれた事かな」

「えっ・・・」

一瞬。

思ってもない発言で。

声が止まっちゃった。

そんな様子を見て、尚希くんが。

「なんてね！恵利菜ちゃんは？」

「あたしは・・・」

「うん」

「えっと・・・」

「ズバリ、何なの？」

「うん・・・ずばりい・・・」

あたしも勇気を振り絞って。

「尚希くんと・・・友達に・・・なれたこと・・・かな」

言っちゃった。

言っちゃったよお。

尚希くん。

どう答えてくれるかな？

「・・・そっか。俺と一緒に！」

「・・・うん、そうみたい」

恥ずかしくて尚希くんの目を見れない。

でも、尚希くんの視線は感じる。

「なあ、俺達。良く気が合うしさぁ・・・」

「うん・・・」

やだっ。

告白して来るつもりかも。

心の準備、まだ出来てないよお。

本当に？

もう・・・

胸の鼓動が高まって。

破裂しそうなくらい。

本当の本当に？

どうしよう！

どう答えればいいの！？

ああっ！

気が動転しちゃって。

気が気でなくなっちゃってるう。

「・・・もし、良かったら・・・」

その時。

「ひゃー！朝、顔洗うのは本当に気持ちいいなあ～」

広瀬くんが部屋に戻ってきた。

そうやってこっち側を見てきたのに気付いた尚希くんは。

「広瀬、もう帰って来たんか」

「なんだ。やけに悔しそうに言うな」

「いや、別にそうでもないけどよ」

「ふーん。さて、そろそろ美恵ちゃんも起こすかな」

そう言って。

美恵ちゃんが寝てる横にこっそり潜り込む。

「せーの」

「・・・うーん！くすぐったいいー！」

広瀬くんが一生懸命、美恵ちゃんをこそばす。

「もう、やめてったら！」

美恵ちゃん、怒っちゃった。

広瀬くんは美恵ちゃんに怒られて、こそばしていた手を止める。

「もう朝だぜ。起きようぜ」

そう言われた美恵ちゃんが。

「広瀬くんには関係ないでしょ」

！？

美恵ちゃんがこんな事言う所。

今日、初めてみちゃった。

寝起き悪かったっけ？

「えっ？まさか、本当に怒ってる？」

広瀬くんが冗談っぽく聞く。

「うん。全てにね」

「全て？どういうこと？」

「自分が一番知ってるでしょ」

「ああ、昨日の手紙の事で怒ってる？言う前に寝ちゃって悪かったよ。

ちゃんと話すよ」

「そんなことじゃないわよ！」

「・・・」

美恵ちゃんの声で辺りがシーンとなる。

美恵ちゃん、本気で怒ってる。

どうして？

一体何の事で怒ってるの？

「じゃあ、なんだよ」

「信じらんない。それ本気で言ってるわけ？頭にきちゃう」

「本当にわかんねえから聞いてるんだろ？何怒ってんだよ？」

「バカッ！」

パチン！

あっ！

美恵ちゃんが広瀬くんの頬を叩いた。

「いってえ！何すんだよ！いてえじゃんか！」

「あんたが叩かれる事したんじゃない！叩かれる原因作っておいて

"何すんだ"は、ないでしょ！」

「俺が何したって言うんだよ。だから言ってみろよ。

それでもし俺が悪かったら謝るから」

「謝るって問題じゃないわよ。広瀬くんって本当に最低！」

パチンッ！

さっきよりもきつく広瀬くんの頬を叩く。

「広瀬くん、信じてたのに。バカッ！広瀬くんなんか、大嫌い！」

そう言って。

美恵ちゃんは部屋を走り去ってしまった。

「なんだよ！ほんっとうにわけわかんないよ！」

広瀬くんは寝ていた美恵ちゃんの枕に八つ当たりする。
その様子を見て、直樹くんが話しかけてきた。

「恵利菜ちゃん」

「ん？」

「加藤さんが怒ってる原因、知ってる？」

「ううん。わかんない。どうしたんだろう。あんな美恵ちゃん見るの
初めてだよ」

「そっか。どうしたんだろうな」

美恵ちゃんの声で、部屋みんなは起こされちゃったみたい。

そりゃ、あんなに大きな声を出したら。

誰でも起きちゃうよね。

「広瀬、どうしたんだ？」

石井くんが広瀬くんに聞きに来た。

「わかんねえ。何もしてないのに」

「今の加藤さんの様子見てると、広瀬お前昨日の夜何かやっただろ」

「昨日の・・・夜？」

昨日の夜？

まさか・・・

美恵ちゃん・・・

勘違い

あたしが広瀬くんを抱かっていた所を目撃した？

これはまずい・・・

美恵ちゃん、誤解してる・・・

広瀬くんはあたしを落ち着かせる為にしてくれたのに。

美恵ちゃんは広瀬くんが浮気してると思ってるんだ。

きっとそう。

そうに違いない！

そうと分かったなら

直ぐに誤解を解かなくちゃ！

あたしは広瀬くんの側に駆け寄った。

広瀬くんは枕に拳をあてながら、こちらに気付く。

あたしは小さな声で広瀬くんに話す。

「広瀬くん。あたし、美恵ちゃんが怒ってる原因わかった」

「えっ？本当に？何？」

「ちょっと耳かして」

「後で返せよ」

「そういう冗談言ってる場合じゃないでしょ！いいから早く！」

「おっ、おう」

耳元に手をあて、こっそりと話した。

[昨日の夜の事、あたしと広瀬くんの現場を美恵ちゃんが見てたんだよ]

[ええっ！？まじで？もしそれで怒ってるなら、俺浮気したと思われるじゃん]

[うん・・・だから、美恵ちゃんはそう思ったんだよ]

[そりゃまずいなあ・・・]

[昨日夜、美恵ちゃんが不貞寝しちゃったでしょ。あれは疲れてじゃなくて、

あたしを探していた時にその現場を見ちゃったからと考えれば、話は合うでしょ？]

[うん・・・そういわれると、話が繋がるね・・・繋がってほしくないけど]

[あたしからも美恵ちゃんに説得するね]

[うん。頼む。とりあえず俺おっかけてみるわ]

[うん]

そう言って広瀬くんは走って部屋を後にした。

その後ろ姿を見送っていると、入れ替わりで尚希くんが近寄ってきた。

「何かヒソヒソと話ししてたけど、何かわかったの？」

答えにくい質問・・・

とりあえず何とかごまかさなきゃ・・・

「んと・・・早くおっかけたほうがいいよって」

「そっか。加藤さん怒ると怖いな」

「そうだね。あたしもあんな姿初めてみたよ」

「恵利菜ちゃんも怒ると怖かったり？」

「うーん、どうかな。あまり人に怒る事がないなあ」

「それはそれで良い事かもな」

「そんなもんかなあ。尚希くんは怒ると怖いよね」

「神田の時か？あれは恵利菜ちゃん泣かしたと思って、ついな・・・」

「ちょっと嬉しかったよ」

「・・・そっか。そりゃよかったって言えば良いのかな？」

「うん」

ちょっと照れる。

あたしの事を思ってあれだけ感情的になってくれたと思うと。

あたしの事思ってくれてるから感情的になったのかな？

もし。

あの場あたしじゃなかったら。

尚希くんはどうしてただろう。

「ねえ、尚希くん」

「ん？」

「あの時、泣いてる人があたしじゃなかったらどうしてた？」

「んー。人にもよると思うけど、どうかな」

「もし、美恵ちゃんだったら？」

「加藤さんか。とりあえず何があったのか聞いてたかも」

「あたしの場合はずぐに怒ったのに？」

「んー。まああれだよ。恵利菜ちゃんとは仲いいし、

加藤さんとはあまり話ししないしね」

「そっか」

曖昧な返事。

仲が良かったから怒ってくれた。

もし美恵ちゃんとも良く話す相手だったとしたら。

同じ行動を起こしてたって事だよな。

尚希くん、誰にでも優しそうだし。

あたし、良い風に考えすぎかな。

「さて、朝の集いの準備しないとな」

「そうだね」

そう言って尚希くんは布団をたたみはじめた。

あたしも準備を始めた。

結局、広瀬くんと美恵ちゃんは部屋に戻って来る事はなかった。

．．．

朝の集いがある場所へ向かうと、広瀬くんの姿が見えた。

でも、美恵ちゃんの姿はない。

広瀬くんに駆け寄り、声をかける。

「広瀬くん、どうだった？」

こちらの声に気付いて振り向く。

「探し回ったけどいなかったよ。美恵ちゃん、部屋に戻ってきた？」

「ううん。戻ってないよ」

「そっか。どこ行ってんだか．．．」

ピーーーーーッ！

先生が集合の笛を吹く。

「さあ、今日の説明終わったら飯盒炊爨に行くぞー。早く並べー」

先生の指示に従って、みんなは整列。

整列が終わった所を確認して、先生は今日の予定を話す。

今日は飯盒炊爨が終わった後、バスで戻る。

これだけの日程なので今日は楽ちん。

神田くんの最後のチャンスでもある。

美恵ちゃんのイザコザでまともに話せる状況じゃないけど。

広瀬くんは神田くんと話しをしてくれるのだろうか。

．．．

先生が今日の説明を終え、飯盒炊爨が出来る場所へ向かうようにみんなへ指示する。

あたしたちも指示された方へ歩き出す。

その場にいない美恵ちゃんを除いて。

歩き始めると、広瀬くんが話しかけてきた。

「なあ、高田さん」

「うん？」

「美恵ちゃん、来ると思う？」

「．．．わかんない。でも．．．」

「でも？なに？」

「美恵ちゃんも本当の事が知りたいだろうから来ると思うよ」

「そっか」

二人とも黙り込む。

しばらくして。

「俺、困っている人見ると、じっとしてられないんだ」

「どういうこと？」

「つまり、ほら、昨日の夜みたいに・・・そういうことだよ」

「そっか。でも、それはそれで広瀬くんの良い所だと思う」

「その良い所がまさかこんな事になるなんて思ってもなかったよ」

「彼女がいたら・・・あれはまずかったね。あたしも共犯状態だから
人の事言える立場じゃないんだけど」

「美恵ちゃん。許してくれるかなあ」

広瀬くんが悲しそうな瞳であたしを見詰める。

「訳をちゃんと話したら、美恵ちゃんは許してくれるよきっと。

あたしからもちゃんと言うから。ね？」

「うん。そうだといいな」

広瀬くんが不安そうな顔でうなづく。

そんな広瀬くんをあたしが見詰めていると。

パッとこっちを向いて。

「話は変わってさあ、ひとつ聞きたい事があるんだけど」

「なあに？」

「高田さんって、仲居の事どう思ってるの？」

「えっ？」

「仲良いし、実際の所、カップルなんじゃないの？」

「そっ、そんなんじゃないよ・・・」

急な質問で驚いた。

周りから見るとそう見えるのかな。

カップル・・・

恋人って事だよな。

あたしと尚希くんが恋人。。。。

そうなれたらいいんだけど。

「実際所、高田さんは仲居の事、好きなの？」

「んと・・・」

さらに突っ込んだ質問に言葉が出ない。

きっと今あたし。

頬が少し赤く染まってる気がする。

あー！

どうしよう！

何て答えよう！

でも好きな事は確かだし。。。

どう答えようか悩んでいると、広瀬くんが先に口を開いた。

「答えられないって事は、好きなんだね」

「・・・」

「告白はお互いまだって所か。仲居の反応はどうなの？」

「・・・どうなのって、あたしはわかんないよ」

「ふーん。まあ、これからって所か。頑張れ」

「・・・うん」

恥ずかしくて広瀬くんの顔が見れない。

つい、下を向いちゃう。

「そうだ。高田さん、仲居に誕生日プレゼント上げたの？」

「えっ？誕生日プレゼント？」

「そうだよ。もしかして誕生日聞いてなかったの？」

「聞いてないよー！いつなの？」

「山下さんがプレゼント渡してたろ？あの日だよ」

「そっか。じゃああれは誕生日プレゼントだったんだ」

「おそらくそうだろうね。でも、山下さんは仲居に毎年何かしら
プレゼントあげてるみたいだけどね」

「そうなの？」

「うん。中学の時から山下さんと俺は仲居と同じ学校だけど、
少なくとも去年も上げてたね」

「そうだったんだ・・・」

これでひとつ疑問が解けた。
尚希くん、誕生日だったんだ。

それで山下さんがプレゼントをわざわざこのオリエンテーションに
持ってきていたって事なんだね。

去年も上げてたって事は。
告白じゃなかった可能性もあるって事なのかな？

それにしても。
誕生日だったのにあたしはオメデトウの一言も言えてない。

なんか、すごく悔しい。

「今からでも遅くないし、オメデトウの一言くらい、言ってやったら？」

「うん。そうする」

「おっ、見えてきたぜ」

「何が？」

広瀬くんが前方を指さす。
その方向を見ると。

野外炊飯場が見えてきていた。

「思ったより、大きいね」

「そうだなあ。なかなか良い感じだ」

「おーい！広瀬一、恵利菜ちゃんー！」

後ろから尚希くんの声が聞こえた。
振り返ってみると。
全速力で走ってくる尚希くんの姿があった。

「尚希くん、どうしたの？」

尚希くんがあたしたちにたどり着くと。

「はぁ・・・はぁ・・・やっとたどり着いたよ」

「どうしたの？全速力で走ってきて。何かあったの？」

「あそこ見てみろよ」

そう言って後ろを指さす。

指の方を目で追ってみると。

そこにはトボトボと歩いている美恵ちゃんの姿があった。

「あれは、美恵ちゃん！」

「本当だ。ちゃんと来てたんだ」

「広瀬くん、今がチャンス」

「おう、今しかないな。ちょっと行って来るわ」

「行って来い。ちゃんと許してもらえよ。何で怒ってるのか知らないけど」

「あたしも行って来る」

そう言って、広瀬くんとあたしは美恵ちゃんの方へ走る。

「美恵ちゃーん」

あたしが見えちゃんに声をかけると。

美恵ちゃんがこちらの声に気づき、顔を上げた。

あたしたちを見ると、急に立ち止まり、また下を向いた。

広瀬くんはあたしよりも全速力で走り、先に美恵ちゃんの前に入った。

「美恵ちゃん、俺の話を聞いてくれ」

「・・・何よ・・・」

誤解

あたしも遅れて美恵ちゃんの前へたどり着いた。

美恵ちゃんはムスツとした顔をしている。

「美恵ちゃん、怒ってる原因が分かったよ。あれは誤解だよ」

「誤解って何よ」

「美恵ちゃんは昨日俺と高田さんが抱き合ったのを見て怒ってるんだろ？」

「さあね・・・」

美恵ちゃんは凶星のような顔しながら別の方向を向く。

「あれは高田さんを慰めてたんだよ」

広瀬くんがそう言う。

美恵ちゃんの顔が余計に険しくなった。

「あっそ。どうせあたしの事なんか何も思っていないでしょ」

「違うよ。あれは訳があって・・・」

「もういいよ！あたしの事好きでも何でも無いでしょ！

さっさと別れたいって言ってよ！」

美恵ちゃんの瞳から涙がこぼれだす。

「だから違うって。美恵ちゃんは誤解してるんだよ」

これ以上見てても美恵ちゃんはヒートアップするだけと思い、
ここであたしも参戦する事にした。

「美恵ちゃん。あたしの話を聞いて」

あたしが美恵ちゃんに話しかける。

「昨日、尚希くんが神田くんを誤解してけんか始めちゃって

どうしようもなくなって・・・あたし、その場を駆け出して離れたの」

美恵ちゃんは呆然としながらあたし話を聞く。

「それでね、あたしが木の陰で泣いてたの。そしたら広瀬くんが来てね」

「・・・」

「泣いてるあたしを落ち着かせてくれるためにしてくれたの。

だから悪気があったわけじゃないし、浮気とかそういう感情じゃないの」

あたしが強く訴えるかのように話すと。

美恵ちゃんは自分の頬を流れた涙の雫をハンカチでふき取る。

「信じてくれ。俺は見えちゃんの事を日がたつにつれて

もっと好きになってるよ！」

「美恵ちゃん。あたしたちを信じて。誤解なの」

あたしと広瀬くんがそう言う。

広瀬くんとあたしの目をじっと何も話さず見詰め。

しばらくして。

「わかった。でも、嫉妬しちゃうからもうしないで」

そう口を開いた。

「もちろんだよ！ごめんね、美恵ちゃん」

「あたしからも謝る。ごめんなさい！」

二人頭を下げる。

少し鼻をすする音が聞こえた後。

「わかった。今回だけだよ」

「ありがと！」

広瀬くんはパッと顔を上げ、美恵ちゃんの手を握った。

「でも・・・」

「でも？」

「今度同じ事したら、その時は本当に許さないから！」

美恵ちゃんが真剣な顔で広瀬くんに忠告する。

「おう、わかった」

「まったく・・・心配したんだから」

「ごめんな」

「まあ、誰にでも優しい広瀬くんも好きだけどね。

でも、胸にキュンときちゃうからやめてね」

「うん。肝に銘じとく」

「うん」

美恵ちゃんから少し笑みがこぼれた。

やっと仲直りできた。

本当によかった。

一時はどうなる事かと思ったよ。

「ねえねえ、広瀬くん」

美恵ちゃんが広瀬くんを呼ぶ。

「ん？」

「昨日の手紙の話の続きなんだけど・・・」

「ああ。差出人ね？」

「うん」

「あれはね・・・」

広瀬くんの息が詰まる。

広瀬くん。

神田くんの事。

美恵ちゃんに言うのかな？

あたしも真剣な顔で様子を伺う。

少しためらった後、広瀬くんは話出した。

「あれはね、女の子じゃないんだよ」

「へっ？ どういうこと？」

美恵ちゃんが不思議そうに問いかける。

「だから・・・」

「はっきり言って？」

「だから、あの手紙の差出人は、男なんだよ！」

「男！？ 何それ！？」

美恵ちゃんがびっくりしてる。

そりゃそうだよね。

まさか男の子だなんて思わないもんね。

「同じクラスの男子で、俺の事が好きなんだとさ」

「ほえ～。それで、断ったの？」

「それが、呼び出しかけられたんだけど、そいつ来なかったんだよ」

「何それ？ 自分で呼び出しといて？」

「うん。ハイキングの途中、倒れた男子がいたろ？」

「うん。たしか神田くんだったけ？」

「そう。神田さ、昨日倒れたからきもだめし来れなかったじゃん。

本当はその時俺にあって、話したいっていう手紙だったんだよ」

「それで？」

「それで、今日の朝、また手紙をもらってね・・・」

「その手紙には何が書いてあったの？」

広瀬くんがガサゴソと胸ポケットをあさり。

あたしが朝手渡した手紙を美恵ちゃんに差し出した。

「読んでいいよ」

美恵ちゃんは差し出された手紙を受け取る。

「あたしも見ていい？」

広瀬くんに聞いてみる。

「うん。いいよ」

あたしと美恵ちゃん二人で、その手紙を覗き込んだ。

美恵ちゃんはあたしが手紙を読みやすい向きに変えてくれた。

その手紙の内容は・・・

『
昨日は、僕が倒れてしまって話す事が出来ませんでした。
僕には、広瀬くんと話をする時間が今日しか残されていません。
何故かと言いますと、この手紙では大変長いお話となってしまうので、
口頭でお話させていただきたいと思ってます。』

今日の、野外炊飯場で再度話したいです。

食事が終わり次第、第一キャンプファイヤー場でお待ちしてます。

よろしくお願いします。

』

と、手紙には書かれていた。

それを美恵ちゃんは見つ。

「広瀬くんってすごい。男の子にももてるんだね」

とのコメント。

「どうするの？会いに行くの？」

「行くしかないだろ。ほっとくわけにもいかないし」

「行ってくれば？」

「うん。行って来るよ。長い話は何なのかも聞きたいし」

「そうだね。ところで、神田くんとは広瀬くんはどういう知り合いなの？」

「神田はね、中学の頃からの友達で、よく遊びに行ったりもしたよ」

「ふーん。そうなんだ」

「悪いやつじゃないよ。むしろ気配りとか良くきくし、

「いやつだよ。こんな手紙出して来る奴とは思ってなかったけどね」
「そっか。何て断るつもりなの？」
「うーん。神田が思ってくれる気持ちは嬉しいけど気持ちだけ受け取っとくとも
言っといたらいいかね？」
「何かものたりないような・・・」
「まあいいじゃん。俺の事だし、俺が解決するよ。
人から教えてもらった言葉を言うより、自分の言葉を言った方が良いだろうし」
「うん、そうだね。あたし、広瀬くんのそういう所が好き♪」
「ふふ、サンキュー！」

すっかり疑いもはれ、仲良くなった二人。
その後、他愛もない話で盛り上がりながら。

集合場所に到着した。

・・・

みんなは一定の場所を基準として背の順で2列で並ぶ。

みんながそろった事を先生が確認して。
飯盒炊爨の注意事項をみんなに話す。

説明が終わると、みんなは自分達の食場に向かう。

あたしのグループは、第3食場。
ちなみに神田くんのグループは第1食場。

オリエンテーション最後の行事。
最後なんだから、楽しくやらなきゃね。

美恵ちゃんとも仲直りできたし。

優雅な気分で最後の行事を楽しまなくっちゃ。

・・・

あたしたちが作るのはカレー。
飯盒炊爨といえばカレーだよ。

実はあたし、カレー作るのは得意なの。

といっても、切って炒めるだけだから得意と言う程
自慢できる事じゃないんだけど。

あたしの担当は野菜を切る事。

たまねぎ、ニンジン、じゃがいもに。
サクサクっと切っちゃう。

切れた野菜は軽く炒めた後。
グツグツ音を鳴らして待っているお鍋の中に入れる。

うん、全部入れ終わった。

あとはご飯を炊かなくちゃ。

あれっ？

お米どこにあるんだろう。
あたしはお米を探し回る。

あっ。
なんだ、尚希くんがお米洗ってるじゃーん。

「尚希くん」

後ろから声をかける。

「ん？どうしたの？」

「お米とぎ終わった？」

「うん。もう良いと思うよ」

そう言って、お米を受け取る。

「これで俺の役目は終わった。あとは頑張れよ〜」

「あー！ずっーい！」

「いいじゃん、気にすんなー」

「いけないんだあー！尚希くんも一緒にやってよー」

「えー。もう疲れたよ」

「そんな事言わないで、手伝ってよお〜」

「・・・あっ！あれはなんだ!？」

尚希くんがあたしの後ろの方を指さす。

振り返ってみると。。。

・・・何も無い。

「何も無いよ？」

あたしが視線を戻すと。

「じゃあ、頑張ってねー」

そう言って。

逃げられちゃった。

「あぁー。もう！尚希くんったらあ！」

しかたなく、あたしがお米の準備をする。

お鍋にといだお米を入れて火力の調整をしていると。

「手伝おうか？」

「えっ？」

振り返ってみると、そこには広瀬くんが立っていた。

「手伝ってくれるの？」

「うん。俺腹ペコで倒れそうだからさっさとやっちまおうぜ」

「そうだね。ありがとー」

そう言って、テキパキと薪を入れて火力を上げた。

広瀬くんとおしゃべりしながらやっている。

あっという間に準備完了しちゃった。

「よし、準備完了。んじゃ炊けるまで洗い物でもしとくか」

「うん。そうしょー」

「あたしも手伝うよー」

美恵ちゃんも洗い物を手伝いに来てくれた。

3人で楽しくおしゃべりしながら洗い物を終わらせた。

．．．

しばらく時間がたち。

ご飯もカレーも良い感じに出来上がった。

分担作業でごはんとカレーをいれ、テーブルへ食事を運ぶ。

「おっ、待ってましたー！」

尚希くんがテーブルではしゃいでる。

「どう？おいしそうでしょ？」

あたしが尚希くんに問いかけると。

「うん、うまそう。あっ！」

「どうしたの？」

「これ食べて、おなか痛くならない？」

不安そうに言う。

あたしはその一言を聞いて。

ホッペタをぷくっと膨らまし、尚希くんをジッと睨んだ。

「あっ・・・今のは冗談冗談！」

尚希くんが必死に謝ってきた。

「いいもんえー。尚希くんは食べたらダメだからねー」

「えー！本当に悪かったってばー」

「許してやれば？」

「えっ？」

横から広瀬くんが割り込んできた。

「しかたないなあ。広瀬くんの言葉に免じて、許して上げる」

「サンキュー！そうこなくちゃね！」

「さっ、腹減った。メシメシ」

広瀬くんがおなかをさすりながら言う。

「うん、うまそう。良いにおい」

尚希くんがニヤニヤしながらみんながテーブルに座るのを待つ。

「ちゃんと広瀬くんと尚希くんのはあたしたちの倍入れといたからね」

「おっ。気が向いてるじゃん。合格合格！」

「何が合格なんだか」

そうやって自分の席の椅子に座る。

「そんじゃあ、いただきまーす」

広瀬くんと尚希くんは大きな声で叫んで。

ガツガツと食べ始めた。

・・・

「ごちそうさまでした」

「広瀬、お前食べるの早いな」

「まあね。神田のところにも行かないといけないから」

「そっか。行ってらっしゃい」

「おう。行ってくる」

そう言って。

すぐに走って行ってしまった。

「広瀬も大変だよな。男に好かれてさ」

尚希くんがつぶやく。

「それだけでもてる範囲が広いからすごいじゃん。尚希くんとは違ってー」

あたしはいじわるそうに言う。

「俺は女だけで十分だよ」

「ねえねえ、仲居くん」

美恵ちゃんが口をはさむ。

「なに？加藤さん」

「もしね、広瀬くんが仲居くんに告白してきたらどうする？」

「それって、マジで言ってる訳？」

「マジマジ」

「そんなの断るに決まってるじゃん。俺ホモじゃないし」

「じゃあ、もし仲居くんが広瀬くんの事を好きになっちゃったらどうする？」

「俺は男なんか好きにならないよ。なんでそんな事聞くわけ？」

「なんとなく聞きたくなっただけ」

「ふーん」

そう言いながらパクパクとカレーを食べる。

今気付いたんだけど。

広瀬くんも尚希くんもご飯食べるの凄く早い。

まるで、かまずに飲み込んでいるみたいに。

ほらっ。

そう思っている間にもお皿に入っていたカレーがなくなっちゃった。

「もう1杯いれてあげよっか？」

あたしが尚希くんに問いかける。

「おう。このカレー凄く美味いからもう食べちゃったよ。

やっぱり夏はカレーが一番だねー」

「まだ夏じゃないんですけど・・・」

「まあ、春も夏も一緒みたいなもんだよ」

「一緒じゃないけどね・・・はい、お皿かして」

「おう」

そう言って、お皿を受け取る。

「じゃあ入れてくるからちょっと待っててね」

そう言い残し、あたしはご飯とカレーをおいてある場所に向かう。

尚希くんのカレーをまた大盛りに入れながら。

これだけいっぱいいたら食べられるかな？

と、考えながらもいれてしまった。

それをもってテーブルに戻る。

「おっ、帰ってきました」

尚希くんが待ってたかのように。

「おまちどうさま。大盛りに入れといたから全部食べてね」

「うわあっ。こんなにいっぱい？食べきれるかなあー」

そういいながらスプーンを手に取る。

「では、あらためていただきまーす」

そう言って食べ始めた。

「あっ！」

尚希くんの手が止まる。

「どうしたの？」

「あのさ、食べ終わったらちょっと来てほしい所があるんだけど、良いかな？」

「うん、良いけど」

「サンキュー。サクッと食ってしまうわ」

尚希くんが豪快にまた食べ始める。

大盛りに入れたカレーはあっという間になくなり。

気付くともうあたしと同じくらいの量になってる。

本当にちゃんとかんで食べてるのかなあ。

あたしも負けてられないっ！

そう思い、あたしも頑張っって食べる。

そんな様子を尚希くんが見て。

”そんなに急いで食べなくてもカレーは逃げないよ”

だって。

その言葉、あたしが言いたい言葉なんだけどなあ。

そう感じながら食べる。

あたしが食べ終わる頃には、尚希くんはすっかり食べ終わっており、

お茶をすすっていた。

「そういえば、広瀬遅いなあ」

お茶を飲みながら尚希くんがつぶやく。

「そうだねえ。長話っぽかったしねえ」

時計を見てみると。

広瀬くんがここを出てからもう30分位はたってる。

遅いといえば遅いけど。

遅くないと言えば遅くないかな。

「おっ、帰ってきたぞ」

尚希くんが遠くにいる広瀬くんを指差す。

「あっ、本当だ」

美恵ちゃんも指差した広瀬くんを発見したみたい。

尚希くんは早歩きでこちらに戻ってきて。

「いやー、ごめんごめん。神田と話つけて帰ろうとしたらさあ、

また神田が倒れて先生呼んだり大変だったよ」

「また倒れちゃったの？大丈夫？」

「んー。貧血じゃないかって話だったけど。まあ大丈夫じゃね？」

「そうならいいんだけどねえ」

広瀬くんが席に腰かけ、美恵ちゃんと話し始めた。

そんな中、尚希くんが。

「恵利菜ちゃん、もう食べ終わった？」

「うん。やっと食べ終わったよ。尚希くん早いよー」

「ははっ。じゃあ、ちょっと来てもらってもいい？」

「うん」

あたしたちは二人席を立つと。

「どこか行くの？」

美恵ちゃんが尋ねてくる。

「うん」

「じゃあ、あたしが食器とか後片付けしとくね」

「ありがと」

「美恵ちゃん、あとは頑張ってるね」

広瀬くんが冷やかす。

「広瀬くん、何言ってるの？広瀬くんも一緒に後片付けだよ」

「ええー！マジかよー！」

広瀬くん、ほっぺた膨らましてすねてる。

広瀬くんの行動って、見てると結構面白い。

「じゃあ、行こっか」

「うん」

「いってらっしゃーい」

美恵ちゃんが手をふる。

一方、広瀬くんは。

「ちえ・・・」

まだすねてる。

余程後片付けしたくないみたい。

あたしは尚希くんに誘導され、その場を後にした。

思い出の1ページ

サワサワと風が吹く中、山道を歩くあたしと尚希くん。
どこに連れて行ってくれるのかは分からないまま。
トコトコと山を登る。

「ねえ尚希くん。一体何処に行くの？」

問いかけたあたしの方がまるで聞こえてないかのように、
こちらに振り向くことなく歩き続ける。

「ねえ、尚希くんってば」

ピタッ。
尚希くんが足を止めた。

そして、こちらを向き。

「ついたよ。ここを恵利菜ちゃんに見てほしくてね」
「えっ」

あたしは周りを見渡す。

「うわあー」

つい、声を張り上げちゃった。
だって、この山のとっぺんだけ、お花畑。
ほんのり甘いお花の匂い。
一面に咲き開いてて、サワサワと風に吹かれてゆっくり揺れていた。

まるで、あたしたちを囲むかのように咲き開いてる。

この風景は、まさにあたしの夢だった風景。

お花畑の中、素敵な男性と一緒にお花を眺める。

それが、一度でも体験できたら・・・

なんて思ってたのが、もうかなっちゃうなんて。
夢にも思ってなかった。

あたしは瞳を閉じ、ほんのり甘いお花の匂いに包まれる。
かすかなお花の揺れる音が聞こえる。

そんな中、あたしの方にずっと尚希くんの手が添えられた。
瞳を開けると、あたしの横に尚希くんがいて。
小さな声で話しかけてくる。

「俺、この学校にきてから、恵利菜ちゃんに一目ぼれしてたんだ・・・
それで、このオリエンテーションで一緒に話しを出来て凄く嬉しかった」

「・・・」

いきなりの一目ぼれ発言に言葉が上手く出てこない。

尚希くんも。
あたしの事好きでいてくれたんだ・・・

尚希くんの方を向くと、真剣な顔であたしを見詰めていた。

「もし、良かったら・・・」

頭をポリポリとかきながら、戸惑ってる様子。
あたしも・・・
あたしも言わなきゃ。

勇気を持って今までの事を打ち明ける。

「あたしね、学校で尚希くんに見詰められた時、凄くドキドキしたよ。

あたし、中学の時も人を好きになった事もなかったし、
男の子ともちゃんとお話する事が出来なかったの」

「そうだったんだ・・・」

「それでね、尚希くんと目線があった時、つい目線をずらしてたの。

オリエンテーションに来てから、美恵ちゃんに[ちゃんとお話してみたら?]って

言われてから、尚希くんとお話するようになったよ」

「そっか・・・」

「でね、一緒にお話とか、ご飯とか作ったりしてるうちにね・・・」

一呼吸おいて。

あたしは尚希くんの瞳を見て、自分の気持ちを伝えた。

「あたしも、尚希くんの事が、好きになっちゃった・・・」

めいっばいの勇気を出して言っちゃった・・・

今はもう。

心臓が破裂しそうなくらいドキドキしてる。

「そっか。ありがとう」

尚希くんは小さな声でお礼を言うと。

スルスルともう片方の手があたしの腰に手が回り。

尚希くんとの距離が縮まった。

そのまま肩におかれていた手はあたしの頬にそっと添えられ。

サワサワとした風邪にふかれながら。

二人とも瞳を閉じ。

まぶしい太陽の閃光を浴びる中。

二人の唇が。

そっと。

やさしく。

重なった。

・・・

『

オリエンテーションに参加して

1年D組 高田恵利菜

高校生、始まってからの最初の行事、オリエンテーション。

友達が出来るかな？仲良くしていけるかな？

そんな不安を抱きながら、オリエンテーションに参加しました。

一緒になったグループで、食事を作ったり、班行動をしているうちに、

どんどんと会話が出来るようになってきて、学校に変える頃には

親友と言える位のお友達も出来ました。

これから始まる高校生活も、毎日楽しくすごしていけると思います。

このオリエンテーションに参加して本当に良かったと思います。

』

「これで良しと」

思わず、口に出して言っちゃう。

「もう出来たの？」

尚希くんがびっくりしたような声でこちらの作文を覗き込む。

「うん。読んでみると、全然内容書いてないけど……」

「まあいいんじゃない？とりあえず感想文だしさ」

「うん……まいった」

「広瀬は出来た？」

尚希くんが質問する。

「いや……俺、感想文とか書くの苦手……」

「あらら。加藤さんは？」

「あたしは出来たよ。ばっちり！」

「まじで？やるなあー！あっ！」

尚希くんが声を上げる。

「急に大声だして、どうしたの？」

「そういや、山下さんから誕生日プレゼントもらったの忘れてたよ」

そう言えば、オリエンテーションの時にもらってたのだ。

まだ開けてなかったんだ。

あ・・・

あたしまだオメデトウいってない・・・

「尚希くん、遅れながらだけど、誕生日おめでとう」

「ん、ああ、ありがと。そういや恵利菜ちゃんに言ってなかったよね」

「うん。言ってくれてたらあたしも当日オメデトウいえたのに・・・」

「ははっ。来年は当日によろしくな」

「うん！もちろんだよ！」

「サンキュー」

尚希くんは円満の笑みをあたしに見せた。

来年こそは、あたしもプレゼントしなきゃ。

「そのプレゼント。ラブレターとか入ってんじゃねえの？あけてみるよ」

広瀬くんがプレゼントを指さして冷やかす。

「そうだな、開けてみるか」

あれ？

ここで開けちゃっていいの？

尚希くんはかばんからプレゼントを取り出し、綺麗に結ばれているリボンをはずす。

包装紙の中には、大きな箱が入っていた。

”仲居くん、ハッピーバースディ！”

と書かれてある。

「大きいなあ、あいつのプレゼントは・・・無駄に・・・」

そういいながら、箱を開けると。
一回り小さな箱が中に入っていた。

「やっぱりな。今年もこれかよ」
「今年もって、去年もなの？」

あたしが尚希くんに聞くと。

「ああ。まあ、これが何回か続くだろうな」

そう言いながらさらに箱をあけ、その中の箱をあけ、
さらにその中の箱をあける。

すると・・・

「きゃははははっ」

あたし、その中身を見てつい、笑っちゃった。

だってね。
箱の中身は・・・

大きな箱の中にぽつんと5円チョコがはいつてるんだもん。

「ははは・・・仲居、お前本当に舐められてるな」

広瀬くんがおちよくる。

その5円チョコを尚希くんは手にとって。

「まったく・・・今年もかよ。去年に続いて5円チョコとか・・・」

このプレゼントを見て。
あたしは少しほっとした。

山下さん。

好きで渡したんじゃないかって。

冗談で渡してたんだね。

そのプレゼントを見て、あたしの全てのひっかかりはなくなった。

．．．

高校生活が始まって即効。

あたしは彼氏が出来ました。

あたしだけじゃなく、親友の美恵ちゃんも。

オリエンテーション。

色々あったけど、今では良い思い出です。

これからどうなるのかは。

あたしにはわからないけど。

毎日楽しく。

尚希くんや美恵ちゃんとすごすつもり。

でもね。

どうなるのかなんて。

分からない方が楽しいよね。

毎日ハラハラドキドキできるんだもん。

初めての恋愛。

初めての彼氏。

そして、初めてのキス。

高校生活第1ページに刻み込まれたあたしの思い出。

一生忘れないよ。

あなたも恋人がいれば。

あたしと同じ考えになるよね？

この小説を読んでいるあなたも。

きっと。

ね？